

渋野丸山古墳発掘調査報告書

2006. 3

徳島市教育委員会

正誤表

訂正箇所 第13図・第14図・第15図・第16図・第17図
・第18図・第19図のスケール

誤



正



渋野丸山古墳発掘調査報告書

2006. 3

徳島市教育委員会

例　　言

- 1 本書は徳島市教育委員会が、渢野丸山古墳の保存、活用を図るために実施した発掘調査の報告書である。
- 2 渢野丸山古墳は、徳島県徳島市渢野町三ツ岩及び渢野町学頭にまたがって所在する。
- 3 事業は徳島市教育委員会が実施した。第2次調査及び第4次調査～第6次調査は、国庫補助（埋蔵文化財緊急調査費国庫補助）を、また、第5次調査～第6次調査は、県費補助（徳島県文化振興事業費）を得て実施した。
- 4 調査は、平成11年度～平成17年度にわたって、以下の期間で実施した。
　第1次調査 平成11年6月15日～平成11年7月5日
　第2次調査 平成13年2月27日～平成13年3月30日
　第3次調査 平成14年1月9日～平成14年2月1日
　第4次調査 平成14年11月26日～平成14年12月28日
　第5次調査 平成16年4月30日～平成17年3月29日
　第6次調査 平成17年5月18日～平成18年1月26日
- 5 第1次調査を瀧山雄一、第2次調査以降及び全ての整理作業を下田順一が担当した。
- 6 調査にあたっては、文化庁文化財部記念物課、徳島県教育委員会文化財課から指導及び助言を得た。
- 7 古墳及び周辺地形のレーダー探査は、国立大学法人富山大学に委託した。
- 8 調査にあたっては、土地所有者の皆様をはじめ地元渢野町内会の多くの皆様のご協力を得た。また、赤色顔料の分析と小型丸底壺のX線写真の撮影には、徳島県立博物館の魚島純一氏にご協力いただいた。深謝の意を表します。
- 9 本書の執筆は、下田が行った。「地中レーダー探査による徳島市渢野丸山古墳の規模と主体部の研究」については、富山大学の岸田徹氏、福富雅男氏と酒井英男氏から玉稿を賜った。
　編集は、徳島市教育委員会が行った。
- 10 本書の遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真は下田が撮影した。古墳の遠景写真は、徳島県立博物館のご協力を得て、提供を受けた。
- 11 発掘調査で得られた遺物、その他の資料は、全て徳島市教育委員会が保管している。
- 12 本書で示す方位は、国土座標（世界測地系4系）を使用し、標高は東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
- 13 土層と出土遺物の色調については、『新版標準土色帖』を用いた。
- 14 本書の位置図に関しては、徳島市開発部都市計画課発行の「10,000分の1の徳島市全図」を使用した。
- 15 調査全般にわたって、下記の方々から有益なご教示を得て、ご指導いただいた。感謝の意を表します。
　東潮氏、天羽利夫氏、石井伸夫氏、伊藤正義氏、魚島純一氏、大久保徹也氏、岡田康博氏、岡山真知子氏、岡村道雄氏、川西宏幸氏、岸田徹氏、岸本直文氏、木村義行氏、栗林誠治氏、藏本晋司氏、小林勝美氏、酒井英男氏、坂井秀弥氏、定森秀夫氏、白石太一郎氏、下川清氏、香原康夫氏、清野孝之氏、高島芳弘氏、玉田芳英氏、中村豊氏、西村康氏、西口和彦氏、権宜田佳男氏、福富雅男氏、福家清司氏、藤川智之氏、北條芳隆氏、本中眞氏、山尾幸久氏、湯浅利彦氏
- 16 調査にあたっては、土地の所有者並びに各関係者の方々にご協力、ご配慮を得た。感謝の意を表します。
　沖登志治氏、沖文子氏、金井輝義氏、川原勇氏、坂口安子氏、中西賢治氏、美馬昭一氏、美馬正一氏、美馬信義氏、美馬貞子氏、美馬勝氏、内輪農氏、高田豊輝氏、寺沢正好氏、渢野町文化財保勝会、渢野公民館、徳島市開発部道路建設課、(有)松山工務店

本文目次

例 言

第1章 調査に至るまでの経緯と経過・体制	1
1. 調査に至るまでの経緯	1
2. 調査の経過と体制	2
1) 調査の経過	2
2) 調査体制	2
3) その他の関連事業	3
第2章 地理的環境と歴史的環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
第3章 古墳の現状と成果	5
1. 古墳の現状	5
2. 調査成果	6
3. 出土遺物	34
第4章 理化学的分析	53
地中レーダー探査による徳島市渋野丸山古墳の規模と主体部の研究	53
第5章 総括	59
1. 墳丘の形態復元	59
2. 墳丘の構造	60
3. 花崗石の葺き方	60
4. 塙輪の樹立方法等	63
5. 出土遺物	63
6. 墓域と築造時期	63

挿図・表目次

- 第1図 主要遺跡の分布図 4
第2図 トレンチ配置図 7
第3図 第1トレンチ～第4トレンチ 平面図・土層図
第4図 第5トレンチ・第6トレンチ 平面図・土層図
第5図 第7トレンチ・第8トレンチ 平面図・土層図
第6図 第9トレンチ・第10トレンチ 平面図・土層図
第7図 第11トレンチ・第12トレンチ 平面図・土層図
第8図 第14トレンチ 平面図・土層図
第9図 第13トレンチ・第15トレンチ～第18トレンチ
平面図・土層図
第10図 第19トレンチ～第21トレンチ 平面図・土層図
第11図 第22トレンチ～第25トレンチ 平面図・土層図
第12図 第26トレンチ～第32トレンチ 平面図・土層図
第13図 第4トレンチ・第5トレンチ出土の埴輪
第14図 第6トレンチ・第8トレンチ出土の埴輪
第15図 第8トレンチ出土の埴輪
第16図 第12トレンチ出土の埴輪
第17図 第12トレンチ出土の埴輪
第18図 第12トレンチ・第13トレンチ・第20トレンチ
出土の埴輪
第19図 第20トレンチ・第21トレンチ・第23トレンチ
出土の埴輪
第20図 第5トレンチ～第8トレンチ・第12トレンチ
出土の埴輪
第21図 第7トレンチ・第17トレンチ・第22トレンチ
出土の埴輪、
第5トレンチ・第12トレンチ・第19トレンチ
出土の土師器
第22図 徳島市渋野丸山古墳の位置
第23図 地中レーダー探査を実施した範囲
第24図 採査区域 A で得られた代表的な結果(250MHz)
第25図 採査区域 A～D における Time slice 図(深度
約70～105cm) を示す
第26図 採査区域 E で得られた代表的な探査結果
(LINE 1, 250MHz)
第27図 後円部(採査区域 F) での探査範囲
第28図 後円部(採査区域 F) で得られた探査結果(250
MHz)
第29図 後円部(採査区域 F) で得られた Time slice
図(250MHz)
第30図 後円部(採査区域 F) で得られた Time slice
図(500MHz)
第31図 渋野丸山古墳トレンチ配置・墳丘復元図
表 1 出土遺物観察表
写真 1 古墳後円部上での地中レーダー探査風景

写真図版

- 図版 1 古墳遠景(航空写真・南から) 徳島県立博物館提供
古墳全景(南から)
図版 2 第1トレンチ(西から)、第2トレンチ(西
から)、第3トレンチ(南西から)、第4トレン
チ(北から)
図版 3 第5トレンチ(南から)、第6トレンチ(南
から)、第7トレンチ(北から)、第7トレン
チ墳丘第3段・壇(北から)
図版 4 第8トレンチ(東から)、第9トレンチ(西
から)、第10トレンチ(南から)、第11トレン
チ(西から)
図版 5 第12トレンチ(北から)、第12トレンチ埴輪
群(西から)、第13トレンチ(南から)、第14
トレンチ(南から)、第14トレンチ墳丘第3
段斜面(南から)
図版 6 第15トレンチ(東から)、第16トレンチ(南
から)、第17トレンチ(南から)、第17トレン
チ造り出し斜面(南から)
図版 7 第18トレンチ(西から)、第19トレンチ(東
から)、第19トレンチ造り出し斜面、土師器
等出土状況(南から)、第20トレンチ(北から)
、第20トレンチ墳丘第3段斜面裾部(北
から)
図版 8 第21トレンチ(北から)、第21トレンチ墳丘
第2段斜面裾部(北から)、第22トレンチ(東
から)、第23トレンチ(北から)
図版 9 第23トレンチ周濠内埴輪出土状況(南から)、
第24トレンチ(南西から)、第25トレンチ(西
から)、第26トレンチ(東から)、第27トレン
チ(南西から)、第28トレンチ(東から)
図版 10 第29トレンチ(東から)、第30トレンチ(東
から)、第31トレンチ(東から)、第32トレン
チ(東から)
図版 11 円筒埴輪(2、4、5、7、11)
図版 12 円筒埴輪(13、14、16、22)
図版 13 円筒埴輪(25、26、26の線刻部分拡大、27)
図版 14 円筒埴輪(28、29、30、31)
図版 15 円筒埴輪(32、40、41、42)
図版 16 円筒埴輪(45、47、48、49)
図版 17 朝顔形埴輪(50、50の二次口縁部側接合部拡
大、50の一次口縁部側接合部拡大、51)
図版 18 形象埴輪(58、60、65、67)
図版 19 形象埴輪(68、69、70、71、72)
図版 20 土師器(76、77、78、79、80、81、82、83、84)

報 告 書 抄 錄

第1章 調査に至るまでの経緯と経過と体制

1. 調査に至る経緯

渋野丸山古墳は、徳島市渋野町三ツ岩及び渋野町学頭にまたがって所在する前方後円墳で、香川県さぬき市の富田茶臼山古墳に次いで四国で2番目の規模をもつ古墳である。

この古墳については、古くから知られ、大正12(1923)年刊行された『勝浦郡志』には、「大正四年十二月十日の發見で柄鏡式の前方後圓式の古墳」であると紹介されている。前方部、後円部共に後世の開墾等で大きく削り取られているが、周濠があり、推定復原長約90mであるとされてきた。昭和28年「渋野の古墳」のひとつとして徳島県指定史跡に指定され、今日に至っている。

徳島市土木部道路建設課では、市道丈六・渋野線の道路改良工事に伴い、市道拡幅工事を行う計画を立てたことにより、平成11(1999)年5月に、工事区間とその周辺の埋蔵文化財包蔵地について、徳島市教育委員会社会教育課に照会があった。工事予定地内には、当古墳の周濠とされてきた一部にかかる計画も含まれていた。よって、その取り扱いについて協議を行った。さらに、保存のための協議資料を得るために、古墳の周濠の範囲を確認するための発掘調査を実施した¹⁾。その結果、渋野丸山古墳には確實に周濠が存在し、しかも、古墳の周濠の一部に、市道がかかる工事であることが判明したことにより、再度協議を行うことになった。この協議により、土木部道路建設課から、多々羅川付け替え工事及び道路拡幅の計画については、さらに可能な限り南側に車道位置をずらすための設計変更をすること、当古墳の南側にある現在の市道の大半を新しい道路の歩道として取り込み、古墳にかかる部分の現状を変更せずに工事を進めること、等が提案された。この提案によって、古墳の保護が図られると判断し、合意に達した。

しかし、以上の協議を進めていく中で、明らかになってきた問題点がある。まず、県指定史跡である当古墳の指定範囲が明確にされていないため、周辺の民間の小規模工事に対して、有効な保存のための措置がとれないこと。さらには、徳島県下最大規模の古墳でありながら、同古墳の整備と活用を図るための必要な基礎資料が、不足していること等である。そこで、徳島市教育委員会では、以上のような問題点を解明するためには早急に発掘調査が必要であると判断した。よって、これまで小規模ながら成果を上げてきた調査の規模を拡大することとし、平成16年度～平成17年度、国及び県の補助を受け、徳島市が事業主体となって発掘調査を行うことになった。この発掘調査の目的は、1) 古墳の規模と構造と施設、2) 周濠の規模と形状の確認、3) 古墳外側の様相を確認することである。発掘調査にあたっては、文化庁文化財部記念物課、徳島県教育委員会文化財課から指導及び助言を得た。

(註)

- 1) 第1トレンチ～第3トレンチでの発掘調査が、これにあたる。調査成果の詳細については、後述する。

2. 調査の経過と体制

1) 調査の経過

調査は平成11年度からほぼ継続して実施してきた。各年度毎の調査等の内容は、以下の通りである。

第1次調査 平成11年6月15日～平成11年7月5日

・第1トレンチ～第3トレンチの発掘調査

第2次調査 平成13年2月27日～平成13年3月30日

・第4トレンチの発掘調査

第3次調査 平成14年1月9日～平成14年2月1日

・墳丘及び周辺地形の測量調査

第4次調査 平成14年11月26日～平成14年12月28日

・第5トレンチ～第6トレンチの発掘調査

第5次調査 平成16年4月30日～平成17年3月29日

・第7トレンチ～第19トレンチの発掘調査

第6次調査 平成17年5月18日～平成18年1月26日

・第20トレンチ～第31トレンチの発掘調査

平成17年6月7日～8日、7月23日～24日

・富山大学理学部地球科学科（教授酒井英男）によるレーダー探査

平成17年7月16日

・現地説明会を実施。徳島市内外から約100名の参加者があった。

この他にも、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室が、研究のために、レーダー探査を平成14年11月11日～平成14年11月15日と、電気探査を平成15年3月16日に実施している。これに対して、徳島市教育委員会も協力している。

2) 調査体制

本市では、埋蔵文化財を含む文化財保護行政を教育委員会社会教育課文化財係が担当している。

本調査業務に係る組織体制及び関係者を列記する。ただし、平成16年度と平成17年度に限る。

（組織）

教育長 柏木雅雄（平成16年度）、大栗敏治（平成17年度）

次長 青木泰斗（平成16年度～）、高松健次（平成16年度～）

社会教育課

課長 河野康子（平成16年度～）

課長補佐 中山信彦（平成16年度）、宇田裕（平成17年度）

係長 潤山雄一

主任 勝浦康守、三宅良明

指導主事 下田順一

社会教育指導員 阿部喜美代（平成16年度）、原多賀子（平成17年度）

調査補助員（あいうえお順） 市川欣也、倉佐晃次、佐伯俊裕、中野勝美、高木淳

作業員（あいうえお順）

発掘調査関係 青木健司、上田淳子、小川重利、笠井健嗣、川中篤子、中西美恵、牧野稔、

美馬貞子、宮田友加、森すま子

整理作業関係 折野絵美、鷹取恵美子

3) その他の関連事業

徳島市立考古資料館では毎年、企画展『大地からのメッセージ 阿波を握る～発掘調査速報展～』を実施している。平成14年度、平成15年度、平成17年度の企画展には、前年度の涉野丸山古墳の調査成果をパンフレットに簡潔にまとめ、出土遺物も展示した。(平成18年度実施時にも平成17年度の成果を展示等行う予定。)

また、徳島市教育委員会発行の平成13年度、平成14年度、平成16年度、平成17年度版の『徳島市文化財だより』に、各年度毎の調査成果を記載している。

第2章 地理的環境と歴史的環境

1. 地理的環境

徳島市内で最も大きな面積を有する多家良地区の一角を占めるのが、徳島市渋野町である。

渋野町はかつての渋野村である。明治22年、本庄（現在の丈六町）・飯谷（現在の飯谷町）・宮井（現在の多家良町）・八多（現在の八多町）の各村と合併し、勝浦郡多家良村を構成した。昭和26年、多家良村は、徳島市と合併し、現在に至る。

渋野町は、御荷鉾構造線を縱断して流れる勝浦川下流左岸の西方にある。北・西・南の三方向を山塊に囲まれ、その中央部を西から東へ流れる多々羅川が流れる、扇状地にある。方上町との境に、ほぼ東西方向に延びる山塊に、三ツ時山がある。渋野丸山古墳は、この三ツ時山から南東方向に延びる山裾縁辺部に立地する。南には、先の多々羅川、西には、三ツ岩谷川が流れる谷状地形の一角にある。

2. 歴史的環境

渋野丸山古墳の東側には、渋野遺跡（弥生時代～中世の遺物散布地）がある。また、渋野丸山古墳の主軸を西側に延ばした延長線上に渋野天王の森古墳¹⁾（円墳。推定による直径約20m。県指定史跡。）がある。少し離れてはいるが、新宮塚古墳²⁾（円墳。推定による直径約20m。県指定史跡。）、マンジョ塚古墳（円墳。推定による直径約12m。県指定史跡。）とマンジョ塚2号墳³⁾（円墳。推定による直径約20m）を含む小谷古墳群、丈六遺跡（古墳時代後期～奈良時代）等の遺跡がある。

これらの古墳の築造年代は古墳時代中期（5世紀代）と考えられている。

（註）

1) 徳島考古学研究グループ「渋野古墳群の研究」『徳島考古』第2号1985年他

2) 下田順一「マンジョ塚2号墳」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要10』2000年



第1図 主要遺跡の分布図（1：10,000）

1. 渋野丸山古墳 2. 渋野天王の森古墳 3. 新宮塚古墳 4. マンジョ塚古墳
5. マンジョ塚2号墳 6. 渋野遺跡

第3章 古墳の現状と成果

1. 古墳の現状

渋野丸山古墳とその周辺の現状を、墳丘測量図及び現地踏査の所見に基づき、報告する。

古墳は、前方部を西に向け、主軸をほぼ東西方向にとる前方後円墳である。前方部、後円部共に3段築成であり、両者の比高差は約2mである。墳丘北側斜面から北の尾根の切断部分にかけては、孟宗竹の竹林となっている。遺存している墳丘の大部分は、特に耕作地として利用されていない。そのため、年2回程度地元の渋野町文化財保勝会が、県指定史跡「渋野の古墳」環境整備業務を受託して下草刈りを実施している。

1) 後円部

墳丘北側は、古墳北側にある谷川から流出した土砂により、発掘調査により検出した周濠や墳丘第1段は完全に埋没している。墳丘は第2段以上の遺存状態が良好なので、恰も2段築成のように見える。墳丘の東側及び南側は、墳頂部近くから墳丘第1段平坦面まで大きく削られている。これは、かつて民家があったためである。また、各民家があった箇所のそれぞれの墳丘第1段斜面には、石垣が築かれている。現在は、東側は畑地に、南側は畠地として利用されている。墳丘南側T.P.約14m付近の平坦面があり、下の等高線も乱れている。これらは、栗の木を植えるために開墾したためである。墳頂部の中心付近に緩やかな凹地がある。ここに主体部があると考えられる。

2) 前方部

墳丘第2段斜面南側くびれ部付近は、開墾のために、削平を受けている。この開墾の際に、埴輪列と多量の埴輪片が出土したことを地権者の方からお聞きした。また、こここの墳丘1段平坦面肩部のラインが前方部側面の形に従っておらず、第17トレンチ～第19トレンチを調査するまで、その理由がわからなかった。徳島考古学研究グループが昭和45(1970)年に測量した図面¹⁾を見ると、第1段平坦面は、遺存する前方部の西端から、西側に約10m強広がっていたことがわかる。この測量後に行われた開墾のために、削られてしまい、現在畑地になっている。南側の同じ平坦面に墓地が造られている。遺存する前方部の西端は崖面になっており、第2段斜面以上を断ち割った状態で観察することができる。これら失われた部分の構造・遺物等については、全く不明である。

前方部の北側は、T.P.13m付近で等高線の変化が見られ、現地でも墳丘の段築の遺存が確認できる。北側には、古墳を築造する際に、尾根を切断したためにできたと考えられる岩盤の斜面が露頭している。この崖面に沿って、石垣を築いて平坦面を造っている。ここは、以前畑として利用されていたらしいが現在は竹林となっている。

3) 周濠

古墳に隣接する南側及び東側の現在畑地や果樹園になっている所は、周濠の旧態を伝えるものと考えられる。外側肩部の遺存していると考えられるところは次の通りである。第8トレンチと第9トレンチを設定した間にある用水路付近。第1トレンチ～第3トレンチを設定した間にある畦畔。一部失われた可能性はあるが南側にある現道の北端付近。北側は、尾根を切断してでき崖面の下端。西側は、前方部北隅角にある個人住宅への坂道当たりを想定できる。

4) その他

後円部の墳頂部には大きな穴が開いていたが、前方部の南側を開墾した際に出土した埴輪片を、この穴に入れて埋めたことを、地元の方からお聞きした。

長谷寺（徳島市渋野町宮前27）の境内には、後円部の墳頂部に建てられていたが、後世に移されたと伝えられる板碑がある。造られた時代等は不明である。

徳島市渋野町三ツ岩33には、青石の板石が積み上げられている。これらの石材は、三ツ岩谷川に橋として使っていたものである。後円部の主体部の蓋石を掘り出して使っていたのだと伝えられていることを、地元の方からお聞きした。

三ツ時山から延びてきた尾根の傾斜は、古墳の北側にある個人の住宅より少し北側で、角度が急に緩やかになっている。また、尾根の東側の傾斜面は三ツ岩谷川に向かって下っている。さらに、この尾根の中心付近は、どちらかといえば深い谷になっており、その谷口はくびれ部に向かっている。現在、この谷川にはコンクリート製の側溝が付けられ、谷口部分にはコンクリート製の導水管が付けられている。個人の住宅の南側を通る道には、高さ2mを超えるコンクリートの擁壁が造られている。これらの工事については、いつごろ行われたかは確認できなかった。

1) 徳島考古学研究グループ「渋野古墳群の研究」『徳島考古』第2号1985年

2. 調査成果

この節の本文及び平面図で用いる出土遺物の番号は、実測図・図版で使用している番号と対応している。

1. 第1トレント（第3図、図版2）

周濠の存在の有無及び規模、形状を確認するために設定した。周濠の底部、立ち上がり、肩部を検出した。

周濠の底は、T.P.5.75mで、地山を掘削し形成されている。また、立ち上がりの途中の平坦面は、埋め立て造成を繰り返している旧耕作土（土層2～15）の最初の高さと同じであることから、開墾時に削平を受けたためと考えられる。土層16～19は、周濠内堆積土である。このうち土層18の粘土層は、周濠がある程度埋まった後、滞水した状態があったことを示している。周濠外側肩部の上部は削平を受けており、さらに高かった可能性がある。推定復原すれば、肩部の高さは、T.P.約7.1+cm。肩部から周濠底までの深さは、約1.4mを測る。

第1トレントと第2トレントは、共に周濠底や斜面に石材が出土しなかった。このことから、周濠の立ち上がり斜面も、地山を掘削し形成されている。

2. 第2トレント（第3図、図版2）

第1トレントと同様の目的で設定し、周濠の立ち上がりを検出した。

周濠は地山を掘削し形成、トレント西から東へと緩やかに立ち上がっている。土層2～15は、埋め立て造成を繰り返した旧耕作土で、土層16は、周濠内堆積土である。第1トレント同様、周濠外側斜面の上部は、削平を受けている。肩部附近も削平を受けている。

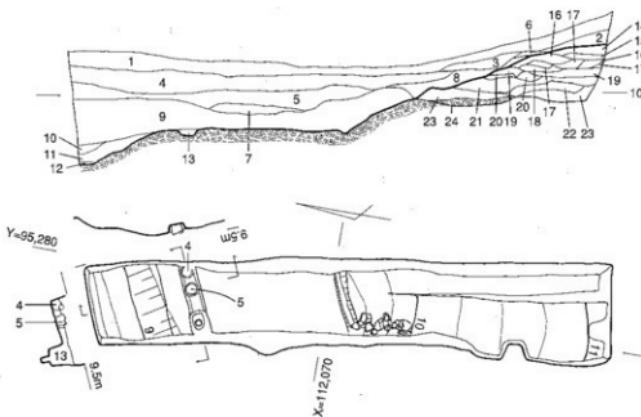
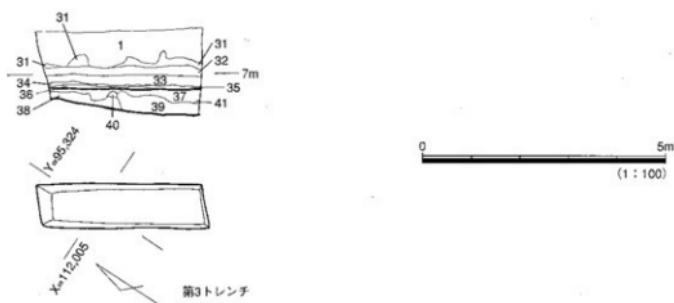
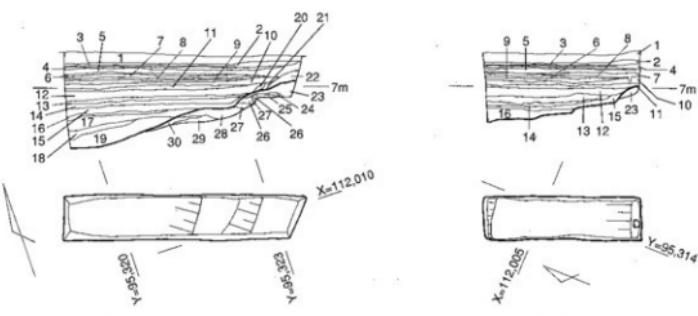
トレント東端で、深さ約0.35mのピット1個を検出した。しかし、遺物がなく、時代・性格等について、不明である。

3. 第3トレント（第3図、図版2）

所謂周庭帯等の有無及び古墳外の状況確認のために設定した。土層31～36は旧耕作土、土層37以下は、T.P.6.65mで概ね水平な地山層である。また、ベースとなる地山層は、東側の三ツ岩谷川に向けて下がりつつある。遺構は検出しなかった。よって、所謂周庭帯は確認できなかった。



第2図 トレンチ配置図



第3図 第1トレンチ～第4トレンチ 平面図・土層図

第1 トレンチ～第3 トレンチ

1	7.5Y5/4灰褐色土	耕作土
2	5Y5/2灰オーリーブ色弱粘質土	
3	7.5Y6/4灰褐色に7.5Y R5/8明褐色が混じる弱粘質土	
4	7.5Y6/1灰褐色粘質土	
5	7.5Y6/1灰褐色粘質土	
6	7.5Y6/1灰褐色に7.5Y R5/8明褐色が混じる弱粘質土	
7	5Y6/1灰褐色粘質土	
8	5Y6/1灰褐色に7.5Y R5/8明褐色が混じる弱粘質土	
9	5Y6/1灰褐色粘質土	旧耕作土
10	2.5Y6/2灰黄色弱粘質土	
11	2.5Y6/1灰黄色弱粘質土	
12	5Y6/2灰オーリーブ色弱粘質土	
13	5Y6/2灰オーリーブ色弱粘質土	
14	5Y6/3オーリーブ色弱粘質土	
15	5Y6/3オーリーブ色弱粘質土	
16	2.5Y5/1褐灰色弱粘質土	
17	2.5Y5/1褐灰色弱粘質土	周濠埋土
18	10Y R3/1黒褐色粘土	
19	2.5Y5/2褐灰色弱粘質土	
20	2.5Y6/1黄灰色土 (小礫を多量に含む)	
21	2.5Y6/2灰黄色弱粘質土 (小礫を多量に含む)	淤土
22	10Y R5/2灰黄褐色土 (小礫を多量に含む)	
23	10Y R5/4にぶい黄褐色弱粘質土	
24	10Y8/2灰白色粘土	
25	10Y R5/4にぶい黄褐色に10Y8/2灰白色が混じる粘質土	
26	7.5Y R5/1褐灰色弱粘質土	
27	10Y R7/6明黃褐色弱粘質土	地山
28	10Y R5/2灰黄褐色弱粘質土	
29	5Y8/4浅黄褐色土	
30	5Y6/2灰オーリーブ色粘質土	
31	10Y5/1灰褐色土	
32	2.5Y6/2灰黄褐色弱粘質土	
33	5Y7/4灰オーリーブ色弱粘質土	旧耕作土
34	2.5Y7/3浅黄褐色弱粘質土	
35	2.5Y7/3浅黄褐色弱粘質土	
36	10Y R6/2灰黄褐色弱粘質土	
37	10Y R6/6明黄褐色に10Y R5/2灰黄褐色が混じる弱粘質土	
38	10Y R5/3にぶい黄褐色に10Y R4/1褐灰色が混じる弱粘質土	
39	10Y R4/2灰黄褐色に7.5Y R3/1黒褐色が混じる弱粘質土	地山
40	5Y6/3オーリーブ色弱粘質土	
41	10Y R5/3にぶい黄褐色に10Y R6/3にぶい黄褐色が混じる弱粘質土	

第4 トレンチ

1	10Y R3/2黒褐色土 (表土)	
2	5Y R4/3にぶい赤褐色弱粘質土	
3	5Y R4/2灰褐色弱粘質土	
4	7.5Y R4/1褐灰色に10Y R4/1褐灰色が混じる弱粘質土	
5	7.5Y R4/1褐灰色弱粘質土	墳丘崩壊土
6	5Y R4/3にぶい赤褐色弱粘質土	
7	5Y R4/3にぶい赤褐色に7.5Y R4/1褐灰色が混じる弱粘質土	
8	5Y R4/3にぶい赤褐色弱粘質土	
9	5Y R4/1褐灰色に5Y R4/3にぶい赤褐色が混じる弱粘質土 (這輪片を多く含む)	
10	5Y R5/2灰褐色土	
11	5Y R5/2灰褐色土 (10よりやや明るい色)	周濠埋土
12	5Y R5/2灰褐色に10Y R3/3黒褐色を含む土	
13	7.5Y R4/1褐灰色弱粘質土 (小礫を含む)	埴輪列の埴土
14	5Y R4/4にぶい赤褐色弱粘質土	
15	5Y R4/4にぶい赤褐色に10Y R4/2灰黄褐色が混じる弱粘質土	
16	5Y R5/3にぶい赤褐色弱粘質土	
17	5Y R4/4にぶい赤褐色弱粘質土 (小礫を多量に含む)	
18	5Y R5/3にぶい赤褐色弱粘質土	
19	5Y R5/4にぶい赤褐色弱粘質土 (小礫を含む)	墳丘盛土
20	5Y R5/3にぶい赤褐色弱粘質土 (小礫を多量に含む)	
21	5Y R5/4にぶい赤褐色弱粘質土 (小礫を含む)	
22	5Y R5/4にぶい赤褐色弱粘質土 (小礫を多量に含む)	
23	5Y R5/4にぶい赤褐色弱粘質土 (小礫を少量含む)	
24	5Y R5/8明赤褐色粘質土	地山

4. 第4トレンチ（第3図、図版2）

古墳北側の遺存状況を確認するために設定した。墳丘第1段斜面と平坦面、墳丘第1段平坦面裾部に溝、墳丘第2段斜面、埴輪列、ピットを検出した。

T.P.約10m未満の墳丘については、地山削り出しにより形成している。また、第2段斜面途中のT.P.10m以上は、盛土により構築している。

墳端は調査区外であり、確認できなかった。また、墳丘の第13トレンチの埋土には、転落した葺石と考えられる石材が見られなかった。

第1段平坦面は、T.P.約9.2mの高さで、幅約3.7mである。この平坦面の肩部付近に肩部のラインに沿って埴輪列（4、5）を検出した。この埴輪列は、地山を掘り込んで造られた布掘りの掘り方に配置されている。ただし、トレンチの西端にあるピットによって跡切れている。埴輪の直径は約30cmで、芯芯間の距離は、約40cmである。

土層9からは、崩落した葺石と埴輪片（1～3、6）が多数出土した。第2段斜面の基底石は遺存していないかったが、葺石は、一部遺存していた。第1段平坦面裾部に、第2段斜面に沿って溝を検出した。地山を掘り込み、底は平らに仕上げられ、幅は約25cm、深さは約8cmであった。埋土は土層9であり、崩落した葺石と埴輪片が出土した。用途等については不明であるが、基底石が据えられた可能性がある。

5. 第5トレンチ（第4図、第13図、図版3）

前方部南側側面の構造と周濠の形状を確認するために設定した。地山削り出しによって形成した、墳丘第1段斜面の一部、周濠を検出した。

トレンチ南側では、周濠底の傾斜の変換点及び土層43～53の堆積状態から周濠の立ち上がりと判断した。周濠斜面と肩部は、調査区外の徳島市道丈六・渋野線の下であるので、遺存状態は不明である。

周濠は、断面が逆台形で、T.P.約5.8mでほぼ一定の深さで地山を平坦に掘削している。

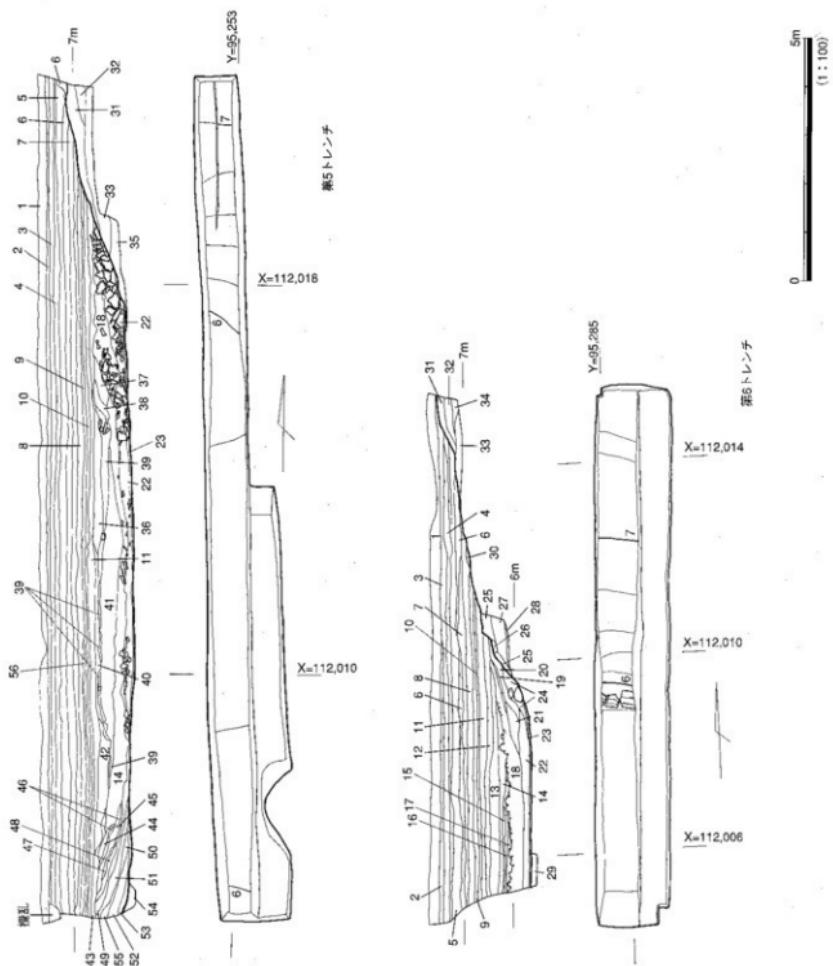
墳丘裾部では、トレンチ北から約4.2mで傾斜角が緩やかに変化を始め、さらにこの変換点から約0.6m北のところで傾斜角が著しく変化する。周濠底のほぼ全域に広がる堆積土層の土層23の上に、墳丘から崩落した葺石や割に大きな円筒埴輪を主とする埴輪片（7～10、55～57）を含む土層18・22が重なっている状態であることから、この著しく変化する点を、墳端と考えた。この墳裾部を精査したが、基底石に相当する石材は遺存していなかった。また、葺石も遺存しているものもなく崩落したと考えられ、第1段斜面の上部は、開墾により削平を受けていた。さらに、ここで出土した埴輪片は、破片も大きく磨滅もしていないので、恐らく第1段平坦面に樹立されていた埴輪が転落したであろうと考えられる。

土層1～11は、遺物を含んでいないので時代は不明ではあるが埋め立て造成を繰り返した旧耕作土である。

6. 第6トレンチ（第4図、第14図、図版3）

平成14年度に、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センターが、地中レーダー探査を行ない¹⁾、徳島市教育委員会等もこれに協力した。この時に後円部南側の周濠部分で、前方部になかった特に強い反応があり、渡り土手のような遺構がある可能性を指摘された。よって、これを基に第6トレンチを設定した。発掘調査の結果、地山削り出しによる形成した墳丘第1段斜面、周濠を検出した。

周濠は、T.P.約5.6mで、ほぼ一定の深さで平坦に地山を掘削し、形成している。



第4図 第5トレンチ・第6トレンチ 平面図・土層図

第5トレンドと第6トレンド

1 2.5G Y4/1暗オーリープ灰色土	耕作土
2 2.5Y5/1灰黄色に7.5Y5/6明褐色が混じる粘質土	
3 5Y7/2灰白色粘質土	
4 5Y7/3浅黄色粘質土	
5 5Y6/3オーリープ黄色弱粘質土	
6 5Y6/3オーリープ黄色弱粘質土	
7 5Y6/2灰オーリープ色弱粘質土	旧耕作土
8 5Y6/2灰オーリープ色弱粘質土	
9 10Y R5/1褐色灰色弱粘質土	
10 7.5Y6/2灰オーリープ色粘質土	
11 5Y6/3オーリープ黄色に2.5Y6/4にぶい赤褐色が混じる粘質土	
12 7.5Y6/2灰オーリープ色弱粘質土	
13 2.5Y6/1黄灰色弱粘質土	
14 10Y7/2灰白色粘土	
15 10Y7/2灰白色に7.5Y R4/1褐色が混じる粘土(砂粒を含む)	
16 10Y6/1灰色細砂層	
17 10Y R5/1褐色灰色に10Y7/2灰白色が混じる粘土	壇丘崩壊土
18 7.5Y R4/1褐色弱粘質土(細繩を含む)	
19 10Y R5/2灰褐色弱粘質土	
20 7.5Y R5/2灰褐色弱粘質土	
21 2.5Y4/1黄灰色土	
22 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土	周濠埋土
23 5Y7/3浅黄色粘質土(土器片を含む)	
24 10Y R5/1褐色弱粘質土	
25 5Y R5/3にぶい褐色に5Y R4/1褐色が混じる弱粘質土	盛土
26 2.5Y5/1黄灰色弱粘質土	
27 5Y R5/3にぶい褐色に5Y R4/3褐色が混じる弱粘質土	
28 5Y R5/4にぶい褐色に2.5Y7/4浅黄色が混じる弱粘質土	地山
29 2.5Y7/4浅黄色弱粘質土	
30 5Y5/2灰オーリープ色粘質土(繩を含む)	壇丘崩壊土
31 5Y R4/1褐色土に5Y5/4にぶい褐色が混じる弱粘質土	盛土
32 5Y R5/4にぶい褐色弱粘質土	
33 5Y R5/4にぶい褐色に5Y R4/2灰褐色が混じる弱粘質土	
34 5Y R5/4にぶい褐色に2.5Y5/1黄灰色が混じる弱粘質土	地山
35 5Y R4/6赤褐色土に5Y R5/3にぶい赤褐色が混じる弱粘質土	
36 2.5Y5/2暗灰黄色弱粘質土	
37 7.5Y R4/2灰褐色弱粘質土	
38 10Y R4/3黄褐色弱粘質土	
39 5G Y7/1明オーリープ灰色粘土	埋土
40 2.5Y6/3にぶい黄色弱粘質土	
41 5Y R4/4赤褐色に5Y R5/6明赤褐色が混じる弱粘質土	
42 2.5Y5/2暗灰黄色に10Y6/2オーリープ灰色が混じる弱粘質土	
43 5Y4/1灰色弱粘質土	
44 2.5Y5/2暗灰黄色弱粘質土	
45 10Y4/1褐色灰弱粘質土	
46 5Y6/2灰オーリープ色粘質土	
47 5Y5/1灰色粘質土(砂粒を含む)	
48 2.5Y4/1黄灰色に5Y5/1灰色が混じる粘質土	周濠外側の埋土
49 7.5Y R3/1黒褐色粘質土(小礫を含む)	
50 10Y R5/1褐色土に10Y R6/6明黄褐色が混じる粘質土	
51 10Y R4/1褐色弱粘質土	
52 10Y R4/2深褐色弱粘質土	
53 10Y R5/1褐色弱粘質土	
54 10Y R6/6明黄褐色に7.5Y R4/4褐色が混じる弱粘質土	地山
55 2.5Y5/1黄灰色弱粘質土	埋土
56 2.5Y6/1黄灰色弱粘質土	

墳丘裾部では、トレンチ北から約7mで傾斜角度が緩やかに変化している。この斜面の途中に、小口を巧みに組み合わせた、一列の横置きにした石材が検出した。これらのことから、この石材を基底石であると判断した。先の変換点から約0.6m北のところで、傾斜角度が大きく変化している。この第1段斜面の葺石は、墳丘から崩落してしまっており、遺存していなかった。土層13~22からは、崩落した葺石の石材や埴輪片が多量に出土している。のことから、第1段斜面には葺石が施され、第1段平坦面には、埴輪が樹立していたと考えられる。

土層2~12は、遺物を含んでいないので時代は不明であるが、埋め立て造成を繰り返した旧耕作土である。よって、T.P.約6.5m以上の第1段斜面は、この開墾に伴い、相当削平を受けている。

7. 第7トレンチ（第5図、図版3）

後円部中央付近で、主軸と直交するように設定した。墳丘第3段斜面、後円部頂、壇を検出した。

第3段斜面の傾斜角度は約25度であり、急である。葺石は遺存しておらず、盛土のみであった。ただし、第20トレンチでは、第3段斜面の葺石と基底石が遺存しており、第2段平坦面には崩落した葺石も検出している。よって、葺石は本来あったものが墳丘の盛土共々崩落している蓋然性が高い。

後円部頂の形状としては、幅約0.8mの平坦面と壇を検出した。墳丘の崩れた層（土層6と9）と壇上の土層2から集中的に形象埴輪等埴輪片（58~62）が出土した。トレンチ南端から北へ約70cm付近の壇上には凹みを検出した。しかし、この埋土である土層2は、埴輪片（58~62）を含み、しまりもなかった。よって、この凹みは、攪乱であると判断した。また、墳頂部及び壇上には樹立した埴輪列痕は検出しなかった。

8. 第8トレンチ（第5図、図版4）

後円部の墳端と周濠の構造を明らかにするために設定した。ただし、第8トレンチを設定した時に、トレンチ東側に設置している用水路があるために、二度に分けて発掘調査を行った。墳丘第1段斜面と周濠を検出した。

周濠は、断面が逆台形状で、T.P.約6.2mではほぼ一定の深さで平坦になるように地山を削り、形成している。トレンチ西端から約6.2m付近から15度で底部の傾斜角度を変換させ始めている。この変換点が墳端であると考えた。また、ここには石材がトレンチを横断するように並んで検出した。これらは、比較的大きな石材を用い、長軸を墳丘に向ける縦方向に置き据えられている。よって、墳丘裾部に据えられた基底石であると考えた。

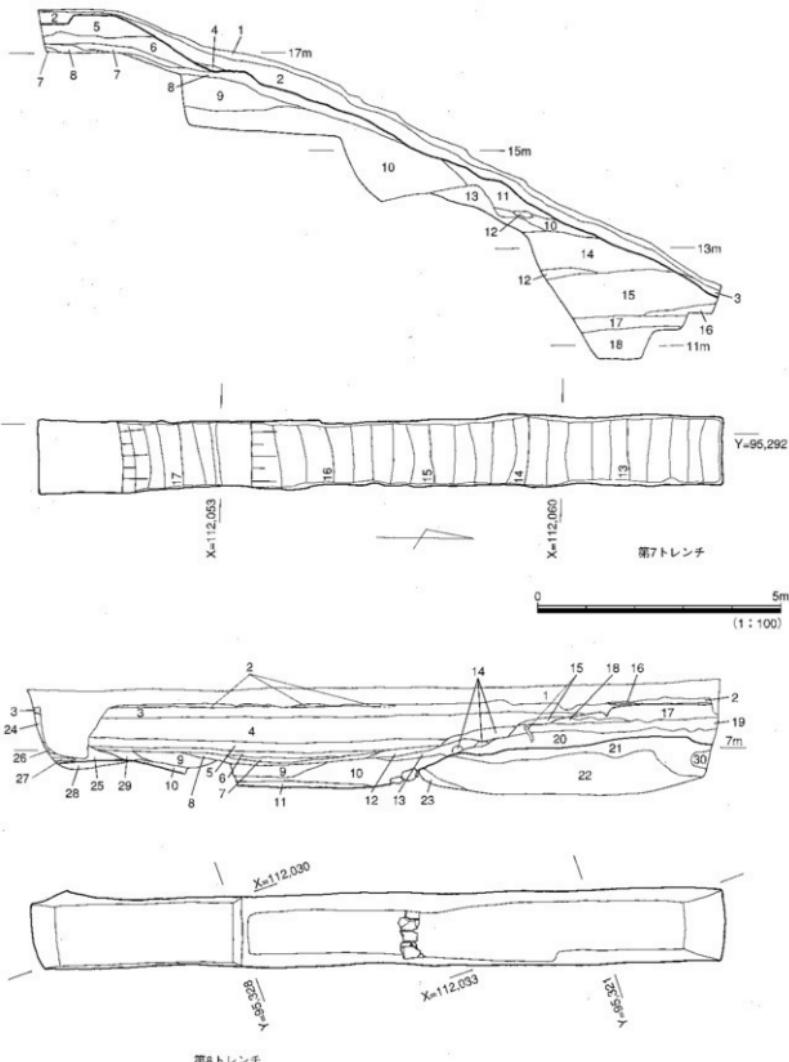
墳丘崩壊土と考えられる土層10からは、墳丘裾部から2mぐらいまでの範囲で、墳丘から転落した葺石と考えられる片岩や、割に大きな破片の円筒埴輪（13~23）や朝顔形埴輪（51）が多量に出土した。第1段斜面は、T.P.約7m以上は攪乱を受けているが、ベースとなる地山層を一部掘り込んだ後、盛土を行い構築している。

周濠外側の立ち上がりは、トレンチ東端から約1.7m付近まで、後世の攪乱を受け、遺存状態が悪かった。地山層の土層28近くまで攪乱を受けていた。

9. 第9トレンチ（第6図、図版4）

第8トレンチとの繋がりを確認するためと、第3トレンチと同様の目的で設定した。

土層6は、一部後世の開墾のために削平を受けている。しかし、高さがT.P.約7.7mで第8トレンチの周濠肩部の高さとほぼ同じであることから、旧地表であると考えた。また、第8トレンチから



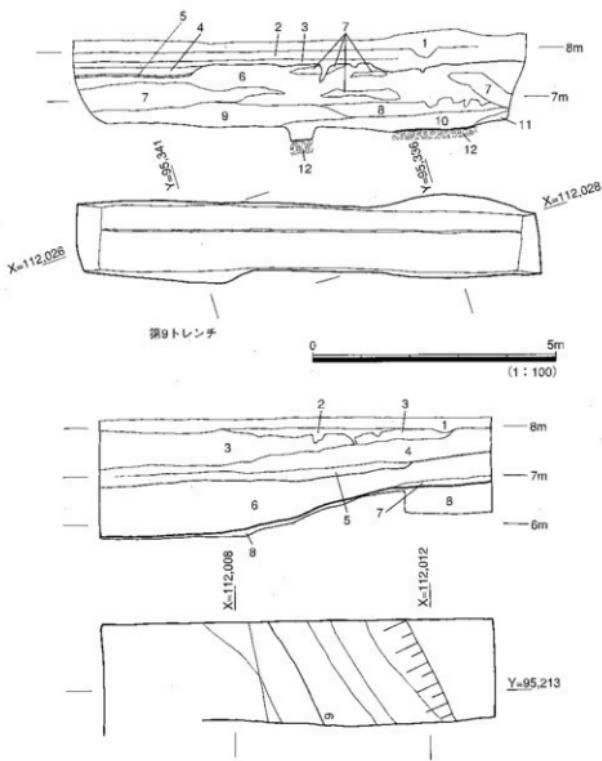
第5図 第7トレンチ・第8トレンチ 平面図・土層図

第7トレンチ

- 1 表土（竹の根が主）
- 2 7.5Y R4/6褐色粘質土
- 3 5Y R4/4にぶい赤褐色粘質土（小礫を含む） 填丘崩壊上
- 4 7.5Y R4/6褐色粘質土
- 5 5Y R4/6赤褐色粘質土（5~10cmの礫を含む）
- 6 7.5Y R4/6褐色粘質土（5~10cmの礫を含む）
- 7 2.5Y R4/8赤褐色粘質土
- 8 7.5Y R3/4暗褐色粘質土
- 9 7.5Y R4/3褐色に2.5Y R4/8赤褐色が混じる粘質土
- 10 7.5Y R3/4暗褐色粘質土（小礫・土器片を含む）
- 11 7.5Y R4/6褐色粘質土（小礫を含む） 填丘盛土
- 12 5Y R5/8明赤褐色に7.5Y R6/6橙色が混じる粘質土（小礫を含む）
- 13 5Y R5/6明赤褐色粘質土（小礫を含む）
- 14 5Y R4/4にぶい赤褐色粘質土
- 15 7.5Y R4/4褐色に5Y R5/8明赤褐色と7.5Y R6/6橙色が混じる粘質土（小礫を含む）
- 16 7.5Y R4/4褐色粘質土（土器片を含む）
- 17 10Y R3/4暗褐色粘質土（小礫を含む）
- 18 10Y R6/4にぶい黄橙色粘質土

第8トレンチ

- 1 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土 農耕土
- 2 10Y R6/6明黄褐色粘質土
- 3 10Y R5/3にぶい黄褐色粘質土（小礫を含む） 旧耕作土
- 4 10Y R5/2灰黄褐色粘質土（小礫を含む）
- 5 10Y R5/2灰黄褐色砂質土
- 6 10Y R6/1褐灰色砂礫層
- 7 2.5Y6/2灰黄色粘土 地土
- 8 2.5Y5/1黄灰色粘土
- 9 2.5Y6/2灰黄色粘土
- 10 2.5Y6/3にぶい黄色粘土（埴輪片・崩落した葺石を含む）
- 11 5Y6/1灰色粘土
- 12 10Y R6/2灰黄褐色砂質土 填丘崩壊上
- 13 10Y R7/4にぶい黄橙色粘土
- 14 10Y R6/2灰黄褐色粘土
- 15 10Y R6/2灰黄褐色粘土
- 16 10Y R7/1黑色土 農耕土
- 17 10Y R5/3にぶい黄褐色粘質土
- 18 10Y R5/3にぶい黄褐色粘質土 填丘盛土
- 19 2.5Y6/3にぶい黄色粘質土
- 20 10Y R7/4にぶい黄褐色粘質土
- 21 10Y R6/6明黄褐色粘質土（礫層を含む）
- 22 2.5Y7/6明黄褐色に10Y R7/1黒色が混じる粘質土（礫層を含む） 地山
- 23 2.5Y7/6明黄褐色粘質土
- 24 10Y R5/4にぶい黄褐色粘質土（小礫を含む）
- 25 10Y R5/3にぶい黄褐色に10Y R4/1黒色と10Y R5/2灰褐色を帶状に含む粘質土 盛土
- 26 10Y R4/1褐灰色粘質土
- 27 10Y R6/6灰黄褐色粘質土
- 28 10Y R6/6明黄褐色に2.5Y7/2灰黄色が混じる粘質土 地山
- 29 10Y R6/2灰黄褐色粘質土 墓土
- 30 積層



第9トレンチ

第9トレンチ

- | | | |
|----|----------------------------------|------|
| 1 | 2.5Y 6/3にぶい黄褐色粘質土 | 耕作土 |
| 2 | 10Y R 5/3にぶい黄褐色粘質土 | |
| 3 | 10Y R 4/2灰黄褐色粘質土 | 旧耕作土 |
| 4 | 10Y R 4/2灰黄褐色粘質土 | |
| 5 | 炭化物層 | |
| 6 | 10Y 5/6黄褐色粘質土(シルト層) | |
| 7 | 礫層 (3~10cm) | |
| 8 | 10Y R 5/2灰黄褐色粘土 | |
| 9 | 10Y R 5/3にぶい黄褐色粘層 | |
| 10 | 10Y R 3/1灰褐色粘質土(小礫、チャート・土器片を含む) | |
| 11 | 2.5Y 5/4黄褐色粘質土(小礫を含む) | |
| 12 | 10Y R 6/6明黄褐色に2.5Y 7/2灰黄色が混じる粘質土 | |

第10トレンチ

- | | | |
|---|---------------------------|-----|
| 1 | 2.5Y 6/3にぶい黄褐色粘質土 | 耕作土 |
| 2 | 7.5Y R 6/3にぶい褐色粘質土 | |
| 3 | 5Y R 5/4明赤褐色粘質土(帯状に小礫を含む) | 整地層 |
| 4 | 5Y R 5/4にぶい褐色粘質土(小礫を含む) | |
| 5 | 7.5Y R 5/4にぶい褐色粘質土 | |
| 6 | 7.5Y R 4/2褐色粘質土(小礫を含む) | |
| 7 | 10Y R 7/4にぶい黄褐色粘質土(小礫を含む) | 地山 |
| 8 | 7.5Y R 5/4にぶい褐色粘質土 | |

第6図 第9トレンチ・第10トレンチ 平面図・土層図

繋がると考えられるベースとなる地山層が東にある三ツ岩谷川に向けて下がりつつある。しかし、第8トレンチと第9トレンチの間に用水路があるために、ベースとなる地山層以外の土層がどのように繋がるかについては、現在不明であり、今後の課題である。

10. 第10トレンチ（第6図、図版4）

周濠の立ち上がりを確認するために当初設定した。約0.8m程掘り下げることで、地山層と考えられる土層6を検出した。後に下の層の確認のために、トレンチ北側で掘り下げたところ、土層7・土層8を検出した。このうち、土層8が南へ下がることが判明した。周濠の一部が外へ広がる可能性があったので、土層6を掘り下げることにした。結果として、土層8が南に下がったが、土層6と土層7の取り扱いについての疑問が残った。このことについては、後に調査を行った第22トレンチほかの結果を合わせて考える必要がある。まず、ベースとなる地山の土層8があり、土層6と土層7はこれを埋没している自然堆積層であると判断した。これら3層は、古墳が造営される以前の旧地形である。また、南側の道路下の地山としても続いている。

11. 第11トレンチ（第7図、図版4）

周濠の規模及び前方部前端面の構造を確認するために、古墳の主軸沿いに設定した。

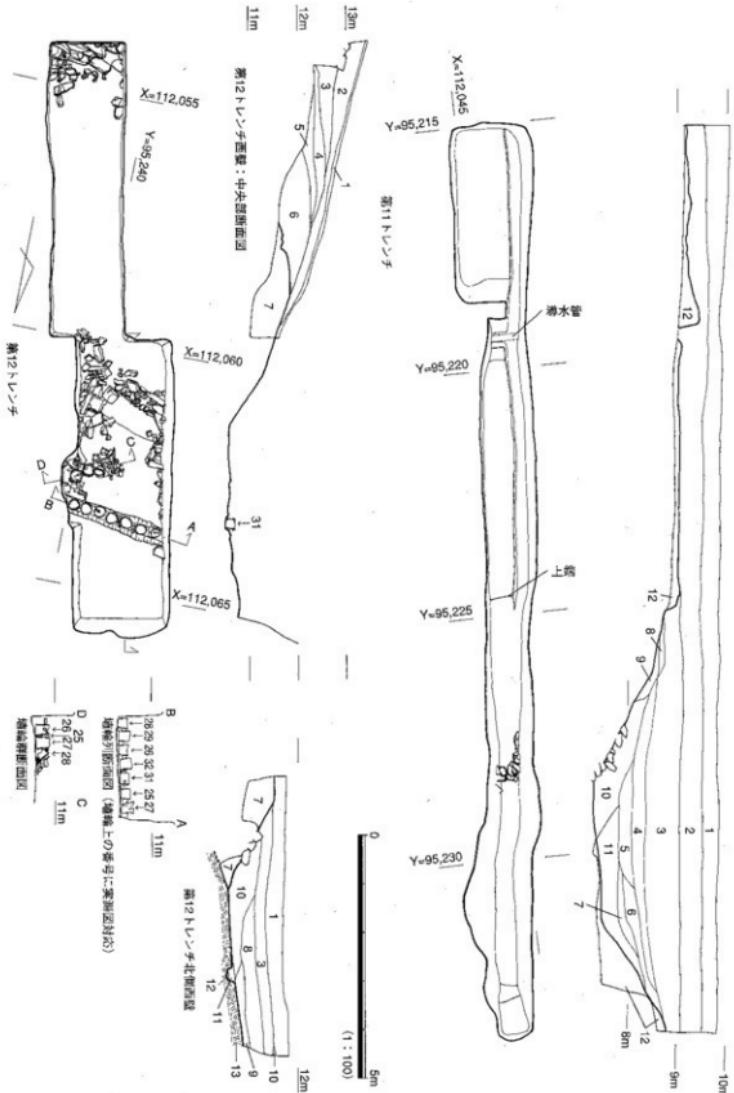
周濠及び周濠の立ち上がり、前方部前端及び墳丘第1段斜面を検出した。地山を掘り込み、墳丘と周濠を共に傾斜角度は約30度で削り出して形成している。また、第1段斜面は、形成後葺石を施している。墳丘崩壊土と考えられる土層10からは、墳丘から転落した葺石と考えられる片岩や埴輪片が多い量に出土した。さらに、墳丘の大部分は耕作の為に削平を受け、第1段斜面肩部の本来の高さは不明である。周濠は断面が逆台形状で、T.P.約7.5mでほぼ一定の深さで平坦に形成されている。なお、周濠外肩部は、トレンチ外である。しかも、ビニルハウスの支柱近くになるため、今回は調査ができなかった。

12. 第12トレンチ（第7図、図版5）

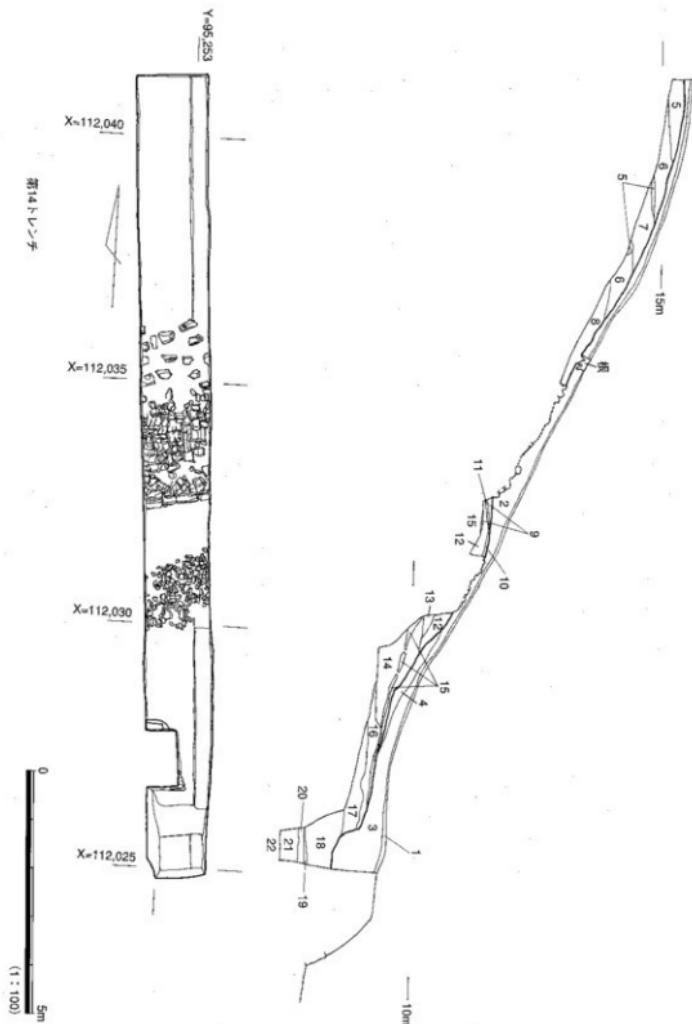
前方部北側側面の墳丘構造を確認するために設定した。墳丘第1段平坦面、墳丘第2段斜面と平坦面、墳丘第3段斜面を検出した。

墳丘を造るために、北から延びる尾根を切断し、岩盤を削って第1段平坦面を造り出している。その岩盤は、第24トレンチ北側に現在一部露頭している。その後地山を掘り込み、形成し、盛土を行い、第2段斜面及び平坦面と第3段斜面を造り出している。また、この岩盤には、前方部北側側面と同じ方向に幅約0.3~0.45mの布掘り状の掘り方が設けられ、円筒埴輪（25~29、31、32）が合わせて7本出土した。これらは、約0.1mの間隔で据えられているが、底部と1段目突帯までから、2段目突帯までが残存していた。この埴輪列の約0.3m程南側のところに、平坦な岩盤直上に口縁部を置き、倒立させた状態の円筒埴輪（25~28）が4本出土した。口縁部の一部に横長の石材が掛かる様に置かれていた。これらの埴輪は、口縁部から第2段突帯が残存しており、復原の結果、同じ埴輪番号のもので接合できた。ただ、意図的にこれらの行為が行われていたのは確かではあるが、その理由については、明らかにできなかった。その他の遺物としては、朝顔形埴輪（52~54）や土師器（広口壺（16））がある。

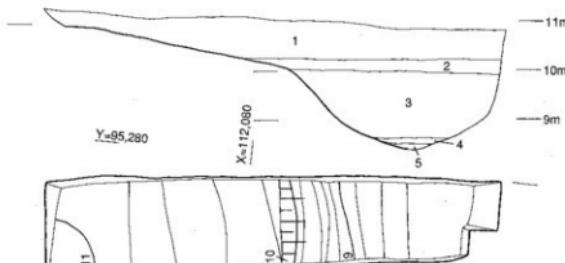
第2段斜面の傾斜角度は上にいくほど緩やかになっている。また、土層10には多量の崩れた葺石が含まれている。これらのことから葺石、墳丘盛土が流出している。この斜面の裾部には、他のトレン



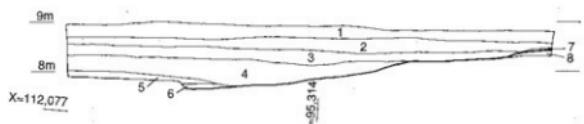
第7図 第11トレンチ・第12トレンチ 平面図・土層図



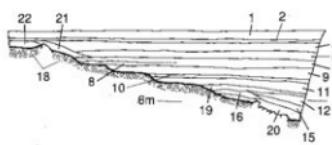
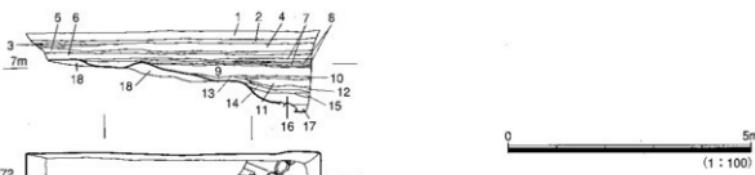
第8図 第14トレンチ 平面図・土層図



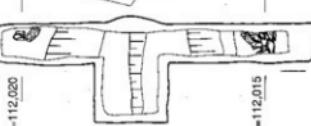
第13トレンチ



第15トレンチ



第18トレンチ



第17トレンチ

第9図 第13トレンチ・第15トレンチ～第18トレンチ平面図・土層図

第11トレンチ

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 1 10Y R4/4褐色粘質土 | 耕作土 |
| 2 10Y R4/3にぶい褐色粘質土 | 現代盛土層 |
| 3 7.5Y R5/6明褐色粘質土 | 整地層 |
| 4 7.5Y R4/2灰褐色粘質土 (15~20cmの礫を含む) | |
| 5 7.5Y R5/6明褐色粘質土 | |
| 6 7.5Y R4/6褐色粘質土 | 埋土 |
| 7 5Y R5/8明赤褐色粘質土 | |
| 8 7.5Y R4/6褐色粘質土 | |
| 9 7.5Y R4/6褐色粘質土 | 周濠埋土 |
| 10 5Y R4/6明赤褐色粘質土 (崩落した葺石を含む層) | 墳丘崩壊土 |
| 11 6Y R5/6明赤褐色粘質土 | |
| 12 5Y R5/8明赤褐色粘質土 | 地山 |

第12トレンチ

- | | |
|--------------------------------------|--------|
| 1 表土 (竹の根が中心) | |
| 2 5Y R4/6赤褐色粘質土 | 墳丘崩壊土 |
| 3 5Y R4/8赤褐色粘質土 | |
| 4 5Y R5/8明赤褐色粘質土 | 墳丘盛土層 |
| 5 5Y R4/6赤褐色に5Y R5/8明赤褐色をブロック状に含む粘質土 | |
| 6 5Y R4/3にぶい赤褐色粘質土 | |
| 7 5Y R5/8赤褐色粘質土 | 地山 |
| 8 5Y R4/8にぶい赤褐色粘質土 (埴輪片を含む) | 埋土 |
| 9 5Y R4/6赤褐色粘質土 | |
| 10 5Y R4/6赤褐色粘質土 (崩落した葺石・埴輪片を含む) | 墳丘崩壊土 |
| 11 5Y R5/4にぶい赤褐色粘質土 | 埴輪列の埋土 |
| 12 10Y R4/4にぶい黄橙色粘質土 | |
| 13 岩盤 | |

第13トレンチ

- | | |
|-----------------------------------|------|
| 1 7.5Y R5/3にぶい褐色砂質土 (礫を含む) | 埋土 |
| 2 7.5Y R4/3褐色砂質土 (礫を含む) | |
| 3 7.5Y R5/3にぶい褐色砂質土 (礫・埴輪片を多量に含む) | |
| 4 7.5Y R7/6明褐色粘土 (礫・埴輪片を多量に含む) | 周濠埋土 |
| 5 2.5Y R7/6明黄褐色粘質土 (礫を多量に含む) | |

第14トレンチ

- | | |
|---|-------|
| 1 表土 | |
| 2 5Y R5/4にぶい赤褐色粘質土 | |
| 3 5Y R5/3にぶい赤褐色膠粘質土 | 墳丘崩壊土 |
| 4 5Y R5/3にぶい赤褐色粘質土 (小礫を含む) | |
| 5 2.5Y R5/8明赤褐色粘質土 | |
| 6 5Y R5/6明赤褐色粘質土 | |
| 7 5Y R5/4にぶい赤褐色粘質土 | |
| 8 5Y R5/4にぶい赤褐色粘質土 (7よりやや暗い色) | |
| 9 5Y R5/3にぶい赤褐色粘質土 | |
| 10 5Y R5/3にぶい赤褐色粘質土 (2より粘質性あり) | |
| 11 5Y R6/6橙色粘質土 | |
| 12 5Y R5/6明赤褐色膠粘質土 | |
| 13 5Y R5/6灰褐色粘質土 (7.5Y R4/1褐色をブロック状に含む) | |
| 14 5Y R5/2灰褐色粘質土 (小礫を含む) | |
| 15 5Y R6/8橙色粘質土 | |
| 16 5Y R4/1褐色粘質土 | |
| 17 7.5Y R5/4にぶい褐色粘質土 | |
| 18 7.5Y R5/3にぶい褐色粘質土 (小礫を多量に含む) | |
| 19 7.5Y R6/3にぶい褐色粘土 | |
| 20 7.5Y R4/1褐色粘土 | 地山 |
| 21 7.5Y R5/3にぶい褐色粘質土 | |
| 22 10Y R5/4にぶい黄褐色粘質土 | |

第15トレンチ

- | | |
|--------------------------------|-----|
| 1 10Y R5/3にぶい褐色粘質土 | 耕作土 |
| 2 7.5Y R5/3にぶい褐色粘質土 (土器片を含む) | |
| 3 7.5Y R5/2灰褐色礫層 (1~10cmの礫) | |
| 4 10Y R5/4にぶい褐色膠層 (5~10cmの礫) | |
| 5 10Y R4/6褐色礫層 (1~5cmの礫) | 埋土 |
| 6 10Y R6/4にぶい黄橙色礫層 (1~5cmの礫) | |
| 7 10Y R2/2黒褐色土 (炭化物層) | |
| 8 10Y R5/8黄褐色粘質土 (5~10cmの礫を含む) | 地山 |

第16トレント～第19トレント

- | | | |
|----|--|-------|
| 1 | 2.5Y R6/5/2灰褐色粘質土 | 耕土 |
| 2 | 10Y R6/2/6黄褐色に10Y R5/6黄褐色を粒状に含む粘質土 | |
| 3 | 10Y R6/2灰褐色に10Y R3/1墨褐色を粒状に多く含む粘質土 | 旧耕作土 |
| 4 | 10Y R6/2灰褐色に10Y R3/1墨褐色を粒状に少量含む粘質土 | |
| 5 | 10Y R6/2灰褐色に10Y R3/2墨褐色を粒状に多く含む粘質土 | |
| 6 | 2.5Y R6/2灰黄色粘質土(小礫を含む) | |
| 7 | 2.5Y R6/2灰黄色粘質土 | |
| 8 | 2.5Y R6/2灰黄色に10Y R3/1墨褐色を粒状に含む粘質土 | |
| 9 | 2.5Y R6/3/3にぶい黄色粘質土(小礫を含む) | |
| 10 | 2.5Y R6/2灰黄色粘土(埴輪片を含む) | |
| 11 | 10Y R5/3/3にぶい黄色粘土に10Y R3/1墨褐色を粒状に少量含む粘質土 | 周塗埋土 |
| 12 | 2.5Y R6/2灰黄色粘土(崩落した頁石を多く含む) | |
| 13 | 10Y R5/2灰褐色弱粘質土 | |
| 14 | 2.5Y R6/1黄灰色粘質土 | |
| 15 | 2.5Y R4/1黄褐色粘土(5~10cmの塊・埴輪片を含む) | |
| 16 | 2.5Y R5/3黄褐色粘質土(小礫を含む) | |
| 17 | 2.5Y R5/1黄褐色粘質土(10~20cmの塊・埴輪片を多く含む) | |
| 18 | 2.5Y R5/3褐色粘質土(小礫を含む) | 地山 |
| 19 | 2.5Y R6/2灰黄色粘質土 | 周塗埋土 |
| 20 | 10Y R5/6黄褐色粘質土(5~20cmの塊・埴輪片を含む) | |
| 21 | 2.5Y R5/3灰黄色粘質土 | 擾乱 |
| 22 | 2.5Y R5/3にぶい黄褐色粘質土 | |
| 23 | 7.5Y R4/1褐色粘質土 | |
| 24 | 5Y R4/6褐色粘質土(微細な礫を多量に含む) | 填丘盛土層 |
| 25 | 2.5Y R4/3にぶい黄褐色粘質土 | |
| 26 | 7.5Y R6/4褐色に2.5Y R4/4にぶい赤褐色をブロック状に含む粘質土 | 地山 |

第20トレント

- | | | |
|----|----------------------------------|-------|
| 1 | 表土 | |
| 2 | 10Y R6/3/3にぶい黄褐色弱粘質土(小礫を含む) | 埋土 |
| 3 | 7.5Y R4/4褐色弱粘質土(崩落した頁石・埴輪片を含む) | 填丘崩壊土 |
| 4 | 10Y R6/2灰褐色砂砾層 | |
| 5 | 10Y R5/1褐色弱粘質土(礫を含む) | 埋土 |
| 6 | 7.5Y R5/3にぶい褐色弱粘質土(礫を含む) | |
| 7 | 7.5Y R4/2灰褐色弱粘質土 | 填丘崩壊土 |
| 8 | 7.5Y R5/3にぶい褐色弱粘質土(小礫・埴輪片を含む) | |
| 9 | 7.5Y R5/3にぶい褐色弱粘質土(小礫・埴輪片を含む) | |
| 10 | 10Y R5/3/3にぶい黄褐色弱粘質土(小礫を含む) | |
| 11 | 5Y R5/2灰オリーブ色粘土 | |
| 12 | 7.5Y R4/4褐色弱粘質土(崩落した頁石・埴輪片を含む) | |
| 13 | 10Y R5/3/3にぶい黄褐色弱粘質土(小礫を含む) | |
| 14 | 5Y R5/2灰オリーブ色弱粘質土(小礫を含む) | 周塗埋土 |
| 15 | 10Y R5/6黄褐色粘質土(崩落した頁石を含む) | |
| 16 | 7.5Y R3/4暗褐色に7.5Y R5/6明褐色が混じる粘質土 | |
| 17 | 10Y R5/3/3にぶい黄褐色砂砾層(小礫を含む) | |
| 18 | 2.5Y R6/3にぶい黄褐色粘質土 | |
| 19 | 2.5Y R6/3にぶい黄褐色粘土(崩落した頁石・埴輪片を含む) | |
| 20 | 2.5Y R5/4褐色粘質土 | |
| 21 | 10Y R6/3にぶい黄褐色粘質土(礫を含む) | |
| 22 | 7.5Y R4/3褐色弱粘質土(埴輪片を含む) | |
| 23 | 5Y R5/8明赤褐色粘質土 | 地山 |
| 24 | 7.5Y R4/4褐色弱粘質土(礫を含む) | 填丘盛土層 |
| 25 | 7.5Y R4/2褐色弱粘質土 | |

第21トレント

- | | | |
|----|--|-------|
| 1 | 表土 | |
| 2 | 10Y R5/3にぶい黄褐色弱粘層(小礫を含む) | |
| 3 | 10Y R6/6明褐色弱粘質土(小礫を含む) | 埋土 |
| 4 | 5Y R5/6明褐色弱粘質土(小礫を含む) | |
| 5 | 7.5Y R5/3/3にぶい褐色弱粘質土(崩落した頁石・埴輪片を含む) | |
| 6 | 5Y R5/4にぶい褐色弱粘質土(小礫を含む) | |
| 7 | 7.5Y R4/2灰褐色弱粘質土(崩落した頁石・埴輪片を含む) | |
| 8 | 5Y R4/6赤褐色弱粘質土(小礫を含む) | 填丘崩壊土 |
| 9 | 7.5Y R4/6褐色弱粘質土(崩落した頁石・埴輪片を含む) | |
| 10 | 10Y R6/6明褐色に10Y R5/4にぶい黄褐色が混じる粘質土(崩落した頁石・埴輪片を含む) | 埋土 |
| 11 | 7.5Y R5/4にぶい褐色粘質土(崩落した頁石・埴輪片を含む) | 周塗埋土 |
| 12 | 7.5Y R5/4にぶい褐色粘質土(崩落した頁石を含む) | |
| 13 | 岩盤 | |

チと比較して大きな石材を貼り石状に使用した葺石が遺存していた。第2段平坦面は、高さは最高でT.P.約12.8m、幅約1.2mである。ここにも、埴輪列を設置した痕跡はなかった。

第3段斜面裾に、墳丘斜面に長辺をあわせて、2段に横積みした石材と、葺石の一部を検出した。その横積みにした石材は、基底石と判断した。

13. 第13トレンチ（第9図、図版5）

第4トレンチで明らかにできなかった墳端、周濠の規模及び形状を確認するため、第4トレンチの北側の延長線上に設定した。

トレンチ北端辺りで岩盤を検出し、地山も徐々に傾斜角が下がった。トレンチ北端から約4.8m南付近で傾斜角が大きく2度変化し、周濠の底への落ちを確認した。このことにより、古墳北から伸びる尾根を切断し、地山を掘削し、周濠を形成したことが判明した。土層4からは、墳丘から転落したと考えられる埴輪片（40）が多数出土した。

このトレンチを調査中に複数の台風の通過により、湧水がひどく、トレンチ壁面の崩壊の恐れが出てきた。その結果、調査を中断せざるを得なくなり、周濠の底及び墳丘の墳端を検出できなかった。

14. 第14トレンチ（第8図、図版5）

前方部南側側面の中で最もよく墳丘の構造が遺存している可能性が高く、第5トレンチの延長線上にできるだけ近いところに設定した。墳丘第2段斜面と平坦面、墳丘第3段斜面、前方部頂平坦面を検出した。

第2段平坦面肩部付近以外の第2段斜面は、後世の擾乱により盛土のみならず、地山層の一部まで削平を受けている。この肩部付近の石材は、やや小型で雑然とした感がある並べ方になっている。しかし、削平を受けていない盛土内に石材の一部が入っており、墳丘直上にあることから、葺石であると判断した。第2段平坦面は、肩部付近の一部に削平を受けているが、幅約1.1mに復原でき、T.P.約11.6mの高さである。また、転落した葺石の間に埴輪片が出土したが、この面には樹立した埴輪列痕はなかった。第3段斜面の裾部は、基底石を斜面に沿うように上下を少しずらした2段の横積みにしている。その上に、傾斜角度を少し緩やかにして小口積みに葺石を葺いている。しかし、基底石以上の葺石は、部分によって墳丘から突き出したり凹凸が激しく、平面的でなかったり、横方向や縦方向の目地等は確認できなかった。また、T.P.約13m付近から上は、葺石の遺存状態が悪く、T.P.約15m付近以上で傾斜角度が変化している。前方部頂平坦面を精査したが、樹立した埴輪列痕がなかった。

第5トレンチの結果から、このトレンチ南端から約1.5mの間に第1段平坦面があると想定していた。しかし、擾乱のため、遺存していなかった。

15. 第15トレンチ（第9図、図版6）

周濠外側の肩部を確認するために設定した。トレンチの東から約2.3m～3mで、周濠の肩部を検出した。周濠は、地山を掘削し形成している。埋土である土層4～6は埴輪片を含む礫が中心の層である。トレンチの幅が狭く、また、湧水が激しく、周濠の底に向かう斜面の一部を検出したのみで、底部まで到らなかった。

16. 第16トレンチ（第9図、図版6）

後円部の墳形の精度を高めるために設定した。周濠、墳丘第1段斜面及び基底石を検出した。

周濠、墳丘とともに、地山を掘削し形成している。周濠は底部は平らに仕上げられ、T.P.約6mである。土層9以上は、墳丘の一部を削平したり埋め立て造成を繰り返した旧耕作土である。周濠埋土である土層12以下の層には転落した多数の葺石と埴輪片が出土した。これらの出土状況を検討する中で、後円部墳端が想定していたラインから外へ広がる可能性が出てきたので、トレンチを西へ1m²広げた。掘り下げた結果としては、想定していた通りの後円部墳端を検出した。墳裾部の基底石は長辺の面が墳丘斜面に沿うように施されていた。第1段斜面の大半は、削平を受けている。また、葺石は遺存していなかった。

17. 第17トレンチ（第9図、図版6）

前方部側面の墳端を確認するために設定した。実際に掘り下げた結果、斜面と平坦面を検出したが当初想定した墳端を検出するまでには到らなかった。よって、南と西へ総面積で約4.2m²拡張して発掘調査を続行した。地山削り出しによる形成した墳丘第1段斜面、造り出し、周濠底部の一部を検出した。土層9以上は墳丘の一部を削平したり、埋め立て造成を繰り返した旧耕作土である。

第16トレンチ～第18トレンチに共通する土層10以下の土層には、崩れた葺石や埴輪片が多量に出土している。これらの層は、墳丘・造り出しが何らかの理由による崩壊し、暫くの間放置されていたと考えられる周濠の埋土層である。トレンチを西に拡張したところで、この土層10の標高より高い平坦面が2段あるが、この平坦面は造り出しと判断した。高い方の平坦面は、T.P.約7mである。第18トレンチや第19トレンチの平坦面の高さがT.P.約7mであることから考えた。ただし、削平を受けていなければ、本来もう少し高さはあったと考えられる。また、このような段差ができた理由としては、開墾による土層9に接していることから、開墾による削平を受けたためと考えられる。したがって、造り出しの上部構造等については、不明である。ただし、造り出し斜面の下部については葺石が遺存していた。この葺石は、墳丘の葺石の施し方と違い、基底石を施さずに、直接斜面上に貼り付ける方法である。この葺石と崩れた葺石の間に、長辺を下にして直立する状況で形象埴輪(68)を検出した。

周濠底部は平らに仕上げられ、T.P.約5.6mである。

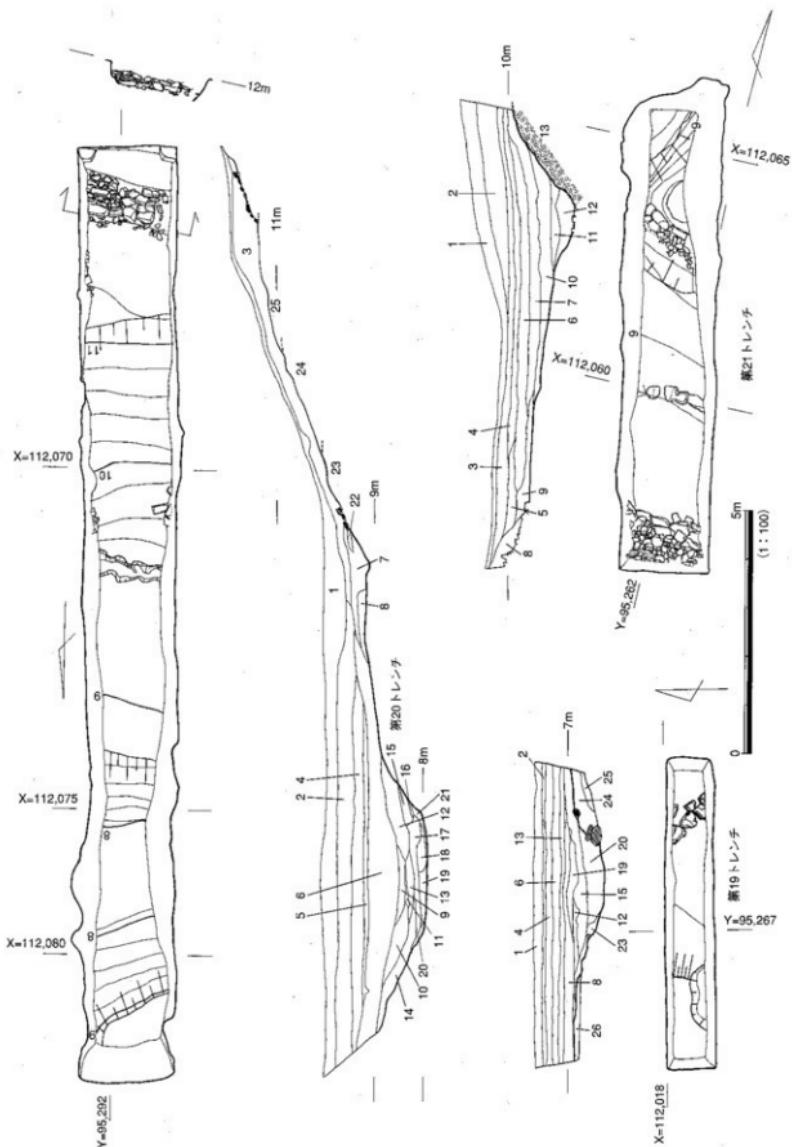
18. 第18トレンチ（第9図、図版7）

第17トレンチで検出した造り出しの西端を確認するために設定した。地山削り出しによる形成した造り出しと周濠を検出した。土層9以上は、埋め立て造成を繰り返した旧耕作土である。トレンチ西から約0.7mに、造り出しの斜面を検出した。平坦面の高いところは、T.P.約6.9mある。しかし、造り出しの平坦面の構造等は、第16トレンチ～第18トレンチに共通する土層10の存在から削平を相当受けた可能性が高く、不明である。第17トレンチでみられた斜面上の葺石は検出しなかった。これは、造り出しの西側斜面の傾斜角度が約70度である。第5トレンチでは基底石を検出しなかった。斜面とトレンチ壁面との間には崩れた葺石は検出している。以上のことから、前方部南側側面の第2段斜面が崩れた際に共に崩れた、または、もともと施されなかった等の理由が考えられる。しかし、今回のトレンチ調査では確認ができなかった。今後の課題である。

19. 第19トレンチ（第10図、図版7）

造り出しの東端と後円部墳裾部を確認するために設定した。地山削り出しによる形成をした造り出し、周濠及び後円部墳裾部を検出した。

造り出しの斜面直上には、崩れた葺石や埴輪片の間に土師器の小型丸底壺(78～84)や高杯(77)



第10図 第19トレーニチ～第21トレーニチ 平面図・土層図

が出土した。これら出土した小型丸底壺の全てがほぼ完形であった。また、出土状態が斜面直上でもあった。さらには、第16トレンチ～第18トレンチでも検出した土層10より下の層の土層23の中から出土していた。以上のことから、これら小型丸底壺は、造り出し上面で使用されてから墳丘が崩れてしまふころまでに転落したものと考えられる²⁾。造り出しの上面の遺存高は、T.P.約6.9m、傾斜角度は約20度である。

周濠底は、T.P.約6.3mで、地山を平らに掘削し、形成している。土層8以上は、埋め立て造成を繰り返した旧耕作土である。

後円部墳端には、第16トレンチと同様に、長辺を墳丘に合わせた基底石が検出した。また、葺石も一部遺存していた。墳丘の大部分は削平を受け、T.P.約7m以上は埋め立て造成を繰り返されている。

20. 第20トレンチ（第10図、図版7）

第7トレンチを北に延長して、後円部の構造をさらに明らかにするために設定した。周濠、墳丘の第1段、墳丘の第2段、墳丘の第3段斜面を検出した。

周濠外側は、地山を掘削し、逆台形に平坦面と斜面を形成している。斜面は約30度の急斜面をなしている。周濠の埋土の土層15～20には、多くの転落した葺石と考えられる石材や円筒埴輪（42）が縦方向に半裁された状態のものが、横倒しになって出土した。第1段斜面は、約35度の急斜面をなしている。第1段平坦面は、裾から徐々に肩部に向けて地山が下がってきている。また、平坦な面ではなく、凹凸が激しい状態であった。さらに、埴輪列や布堀りの痕跡もなかった。しかし、周濠の埋土から出土した石材や埴輪片（41）は、本来墳丘第1段平坦面に施されたと考えられる。この埋土の上に、古墳の北側にある谷から流れ込んできたと思われる土砂が第2段斜面の下部以下を覆っている。締まり具合も悪く、崩れやすい土層である。

第2段斜面は、削平を受け、葺石はほとんど遺存していないかった。また、明瞭な裾及び肩部は検出できなかった。T.P.約10.1mまで、地山削り出し、形成を行っている。これ以上は、地山を削り出すことによってできた残土を盛土として利用して墳丘を構築している。第2段平坦面は、削平を受けたためか、明瞭な肩部ではなく、裾から徐々に下がっている。よって、傾斜角度の変換点等からT.P.約11.4mで、幅約1.1mであったと考えた。また、埴輪列の痕跡は検出しなかった。しかし、第2段斜面の肩部付近やこの平坦面で集中して出土した多量の埴輪片は、後円部頂にあった埴輪列から転落したと考えられる。

第3段斜面は、斜面裾部に長軸を合わせた基底石と葺石の一部を検出した。傾斜角度は約25度である。トレンチの南端は第7トレンチ同様攪乱を受け遺存状態は悪かった。この斜面や先の平坦面には、墳丘崩壊土や転落した葺石の石材が厚く堆積していた。

21. 第21トレンチ（第10図、図版8）

前方部と後円部の取り付き方や構造、及び周濠の状態を確認するために設定した。

周濠外側は岩盤を削り出して傾斜面と平坦面を、周濠底及び墳丘第1段は、地山を掘削し形成している。周濠底はT.P.約8.3mで平らに仕上げられている。T.P.約9m以下の崩落した葺石を含む土層を除去した。すると、第1段斜面には、長軸を墳丘に合わせて施された基底石と葺石の一部が遺存していた。

この葺石の西端と削り出された岩盤の下部の西端が合わさり、トレンチ上から見下ろすと恰も西側を頂点とした三角形を形作っている。T.P.約9m以下の土層を比較しても西壁側の方が東壁と比較

して面積が小さくなっている。これらのことから、周濠はこのトレンチ付近で終わり、ここから西へは周濠は続かないと考えた。

トレンチ南から約3.5m～4m北の第1段平坦面には、遺構の遺存状態は悪いが、浅い溝状の凹みを検出した。この凹みにはさらに、直径約30cm深さ約2cmの底部が平らかな円形の凹みを検出した。埴輪は検出できなかつたが、埴輪列の掘り方痕であると考えた。また、切り合い関係は、東から西方向に樹立されたものと考えられる。

第1段平坦面はT.P.約9.5mであるが、この埴輪列痕付近から徐々に北に向かって下がっている。この斜面のみを覆うように土層10があることから、削平を受けた可能性が高い。

第2段斜面では、上下をずらした2段の横積みした基底石と傾斜角度を少し緩めて小口積みにした葺石を検出した。葺石の積み方には、横長の板状の石材に合わせた横方向の目地を確認できた。この斜面を覆う様な土層8には、多量の崩落した葺石や埴輪片(43)が出土した。このことから、第2段平坦面以上に埴輪列があったと考えられる。他のトレンチの検出状況から考えると前方部頂平坦面から転落した可能性が高いと思われる。

22. 第22トレンチ（第11図、図版8）

周濠の規模及び前方部の左隅角付近の遺存状態を確認するために設定した。

周濠は、地山を掘削し、逆台形に形成している。底部はT.P.約5.9mである。ベースの地山となる土層15は、トレンチ北壁側の東約2.7mから自然の落ちの一部を検出した。この範囲については、トレンチ外であり、不明である。土層12～14は、墳丘あるいは、周濠外肩部の崩壊したものである。土層12には転落した葺石や埴輪片(69～73)が多数出土した。土層5以上は、埋め立て造成を繰り返した旧耕作土である。

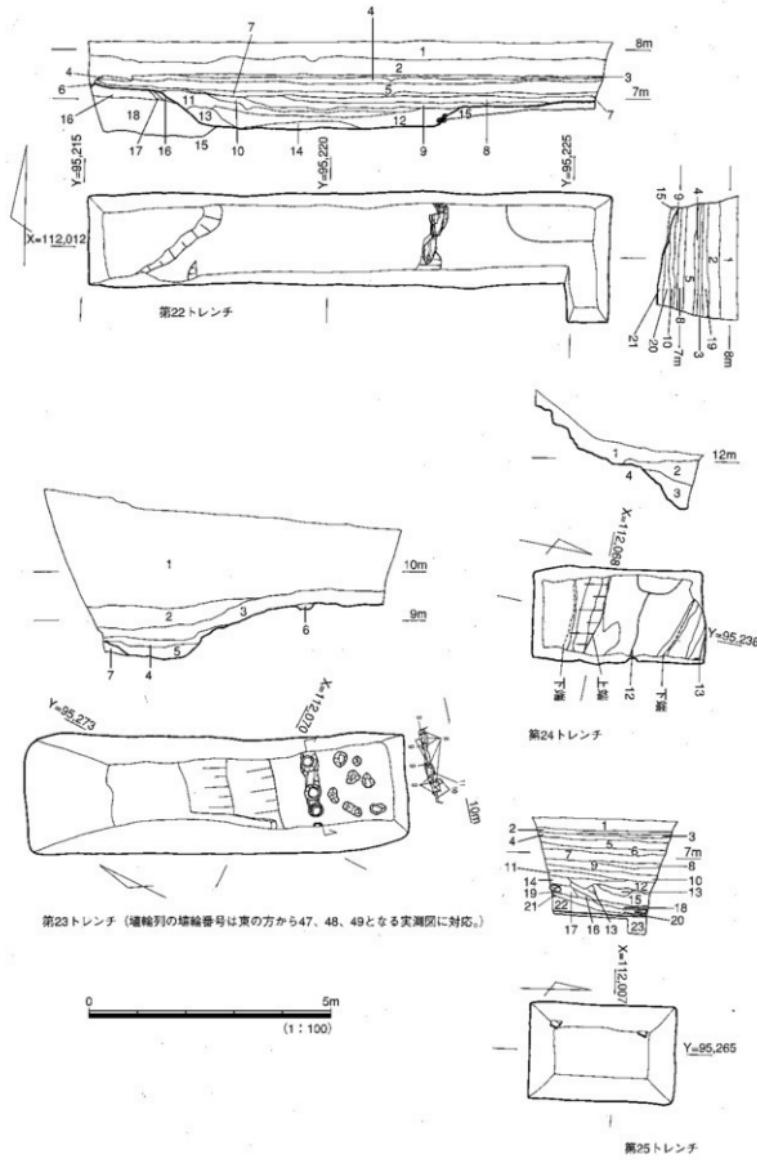
前方部左隅角付近の第1段斜面は、前方部前端に施された基底石3石とこの石材より僅かに高いだけの墳丘斜面が遺存するのみであった。検出した基底石は、長軸を墳丘に合わせている。また、隅角が南北方向に開くように並んでいる。この検出した基底石が隅角に向けて統く可能性を探るために、ピンボールでトレンチの南壁を刺突してみた。しかし、全く手応えがなく、土層の状態から開墾等により石材は遺存していないと考えた。よって、トレンチの拡張を行わないことにした。遺存している基底石については、土層15がこのトレンチの南・北・東の各壁面で厚さが違つておらず、削平を南にいく程大きく受けていること。そして、南端の石材のみ長辺の面を合わせて施していないこと。以上のことから、基底石も南に施されているものほど移動している可能性が高い。墳丘は、傾斜角度は約35度で立ち上がっている。

また、隅角付近の側面墳端の遺存状態を確認するために、トレンチ東端を約0.5m南に調査面積を拡張した。しかし、前方部側面の基底石は、前方部前端の隅角同様に検出できず、墳丘も削平を受け遺存状態も悪かった。墳丘の遺存している最も高いところは、T.P.約7mである。トレンチ東壁の土層の観察により、地山の傾斜角度の変化が見られる箇所を前方部左側面の墳端と考えた。

23. 第23トレンチ（第11図、図版8）

谷口付近の周濠の構造と墳丘の構造を確認するために設定した。岩盤と地山を掘削し形成している周濠、墳丘第1段斜面及び平坦面を検出した。

周濠底はT.P.約8.3m付近である。外側の立ち上がりについては、北の谷口からの出水によって堆積した土層1の締まりがなく崩壊し易かつたこと、三者ある地権者の境界石と石垣をこのまま調査



第11図 第22トレンチ～第25トレンチ 平面図・土層図

第22トレンチ

1	2.5Y 6/3にぶい黄色粘質土	耕作土
2	5Y R4/3にぶい赤褐色粘質土	
3	7.5Y R4/1褐色粘質土	旧耕作土
4	7.5Y R6/1褐色粘質土	
5	7.5Y R5/2褐色粘質土	
6	7.5Y R3/1黒褐色粘質土	
7	7.5Y R4/1褐色粘質土(埴輪片を含む)	
8	7.5Y R5/1褐色粘質土	壤土
9	7.5Y R4/2灰褐色粘質土	
10	10Y R3/1黒褐色粘質土	
11	7.5Y R4/1褐色粘質土	周濠崩壊土
12	7.5Y R7/6明褐色に10Y R4/1褐色が混じる粘質土	堆丘崩壊土 (崩落した葦石を含む)
13	5Y R4/1褐色粘質土	周濠崩壊土
14	7.5Y R6/8褐色に7.5Y R5/1褐色と5Y R4/3にぶい赤褐色が混じる粘質土	周濠埋土
15	7.5Y R6/8褐色に5Y R4/3にぶい赤褐色が混じる粘質土	
16	7.5Y R5/3にぶい褐色砂粘質土	
17	5Y R4/3にぶい赤褐色粘質土	地山
18	7.5Y R4/3褐色粘質土(小砾を含む、第10トレンチの土層6と同じ)	
19	2.5Y R6/2灰褐色粘質土(砾を含む)	旧耕作土
20	10Y R6/2褐色粘質土	周濠埋土
21	10Y R4/1褐色粘質土	

第23トレンチ

1	10Y R6/3にぶい黄褐色砂礫層	壤土
2	10Y R4/2灰黃褐色砂礫層	
3	10Y R5/3にぶい黄褐色砂礫層(崩落した葦石を含む)	堆丘崩壊土
4	7.5Y R6/4にぶい橙色に2.5Y R7/3浅黄色が混じる弱粘質土	周濠埋土
5	2.5Y R7/3浅黄色に2.5Y R5/3橙色が混じる粘質土	
6	10Y R5/2灰黃褐色に5Y R6/6橙色が混じる粘質土	
7	岩盤	
8	10Y R4/2灰黃褐色砂質土(小砾を含む)	埴輪埋土
9	10Y R5/2灰黃褐色に5Y R6/6橙色が混じる粘質土	
10	5Y R6/6橙色粘質土(小砾を含む)	
11	5Y R6/3橙色に10Y R5/2灰黃褐色が混じる粘質土(小砾を含む)	

第24トレンチ

1	表土	
2	5Y R4/4にぶい赤褐色粘質土	壤土
3	5Y R4/4にぶい赤褐色粘質土	
4	岩盤	

第25トレンチ

1	2.5G Y4/1暗オリーブ灰色土	耕作土
2	10Y R6/4にぶい黄褐色に2.5Y 7/2灰黄色が混じる弱粘質土	
3	10Y R6/4にぶい黄褐色に2.5Y 7/2灰黄色が混じる弱粘質土 (2よりやや明るい色)	
4	5Y 6/2灰オリーブ色に10Y 6/4黄褐色が混じる弱粘質土	
5	5Y 6/2灰オリーブ色弱粘質土	旧耕作土
6	2.5Y 6/1灰褐色弱粘質土	
7	5Y 6/2灰オリーブ色弱粘質土	
8	2.5Y 5/1灰褐色弱粘質土	
9	2.5Y 5/2暗灰褐色弱粘質土	
10	7.5Y 6/1灰色弱粘質土	
11	10Y R5/2灰黃褐色弱粘質土	
12	10Y R4/2灰黃褐色に2.5Y 6/1褐色が混じる粘質土	
13	2.5Y 6/2灰黄色に10Y R4/2灰黃褐色が混じる粘質土	壤土
14	10Y R4/1褐色に2.5Y 7/1灰白色が混じる砂質土	
15	7.5Y 7/2灰白色粘質土	
16	10Y R5/1褐色に2.5Y 7/1灰白色が混じる粘質土 (17よりやや明るい色)	
17	10Y R5/1褐色に2.5Y 7/1灰白色が混じる粘質土	
18	5Y 6/1灰色粘質土	
19	7.5Y 6/1灰色粘質土	
20	7.5Y 4/1灰色粘質土	
21	7.5Y 4/1灰色粘質土	周濠外側の壤土
22	5Y 4/1灰色に5Y 5/3灰オリーブ色が混じる砂質土	
23	10Y R5/3にぶい黄褐色に2.5Y R5/1赤灰色が混じる粘質土	地山

を継続すると崩壊する可能性がでてきたので、検出することを中止した。土層2からは、崩落した葺石が多量に出土し、土層3・4からは多量の埴輪片が出土した。特に、土層5からは、円筒埴輪(45)が1個体口縁部を北に向けた状態で倒れ込んでいた。このトレンチ内の埴輪列から転落したものではないことは明白である。何故このような状態で出土したかについては不明である。

第1段斜面は、岩盤を削り出して形成しているが、傾斜角度が2回変化しており、このトレンチ付近については、2段掘りとなっている可能性がある。

トレンチ南から約2m北の第1段平坦面縁辺部には、肩部ラインに沿って樹立した一列の埴輪列(47~79)を検出した。幅約0.3m、現存深さ約0.1mの布掘りを行い、さらに1個ずつ直径約0.3m円形の掘り方である。しかし、各埴輪は等間隔ではない。各埴輪は底部のみが遺存している。また、東端の埴輪のみ疊が内壁に沿わせるように並べられていた。掘り方の底部の高さはあまり一定していなかった。しかし、各埴輪下端は掘り方の底面に接している。ただ、西端の埴輪のみは、安定感が欠けていたためか、底部の下に石を敷き込んで安定させている。

第1段平坦面は、第20トレンチ同様凹凸が激しく平坦な面が少ない。本来の平坦な面の高さは、埴輪1段目突堤付近までは埋置したと考えられる。従ってあと約5cmは高かったと推定できる。

24. 第24トレンチ（第11図、図版9）

第12トレンチを北側に仮定延長し、墳丘裾部の状態を確認するために設定した。

前方部北側側面を形成するために、前方部北側に延びる尾根を断ち切るように岩盤を大きく削っている。この削った痕跡は、トレンチ西側の岩盤露頭箇所で観察できる。この過程で、墳丘に至るまでに急な傾斜角度(約60度)を一度緩め平坦面を造っている。さらに、もう一度急な傾斜角度(約50度)を付け、トレンチ南端にT.P.約11mの平坦面を造っている。この平坦面は、第12トレンチ北端より約0.3m高くなっているが、第12トレンチの平坦面が徐々に北に向かって高くなっていることから、同じ墳丘第1段平坦面であると判断した。また、前方部側面の墳礎は、この平坦面と傾斜面の境であると考える。さらに、この箇所には周濠及び溝等の施設もないことが分かった。このことから、第21トレンチの成果通り、周濠を前方部北側の側面には造っていないことになる。その代わりに標高を比較するならば第1段平坦面は第21トレンチよりも高くし、岩盤の削平の方法も変化をつける等の工夫がみられる。

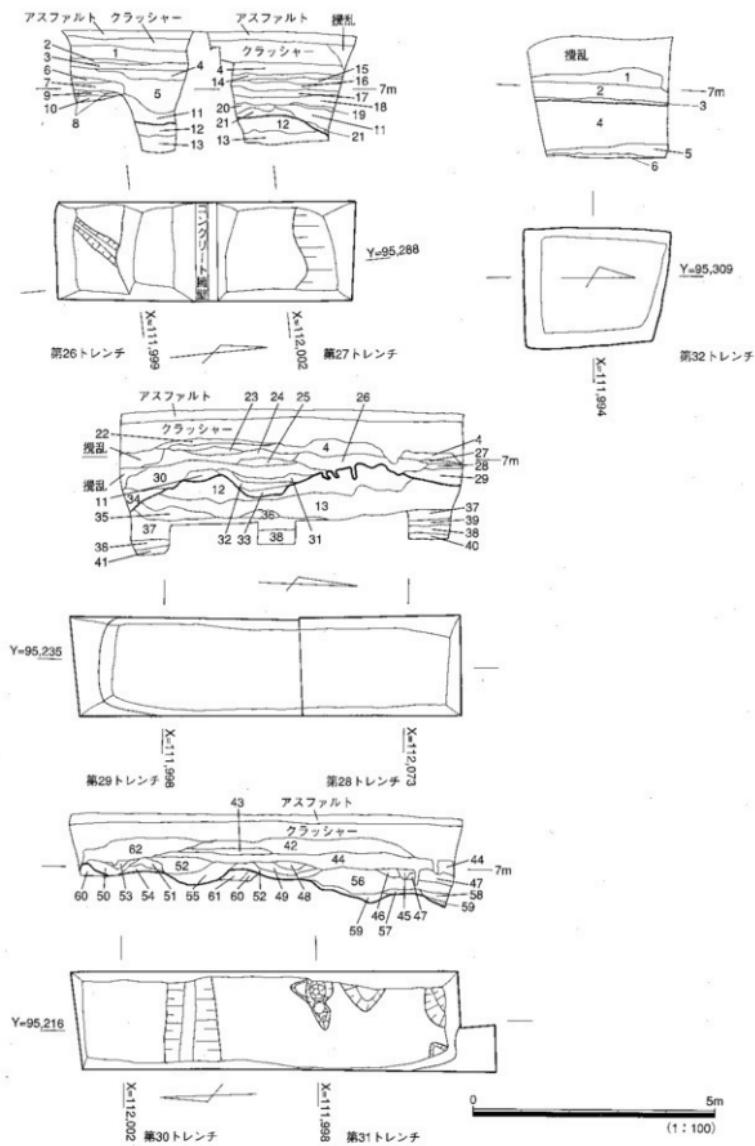
25. 第25トレンチ（第11図、図版9）

周濠の形状（特に外肩の形状）と、外部施設の有無を確認するために第25トレンチから第32トレンチを設定した。ただし、第26トレンチ～第32トレンチは、現道や接しているところでもあるので、できる限り交通の妨げにならない方法を取り、調査を行った。

土層2～10は、埋め立て造成を繰り返した旧耕作土である。土層20には、崩落した葺石と思われる石材が、トレンチ北側に集中して出土した。周濠底は、地山掘削し平らに仕上げられていた。土層20と21は、トレンチ南から約1.3m付近から南に向けて上がり始めている。このことから、現道北側の擁壁下付近から周濠の立ち上がりが始まるであろうと考えた。

26. 第26トレンチと第27トレンチ（第12図、図版9）

第6トレンチで検出した周濠の立ち上がりを検出するために設定した。ただし、第6トレンチのすぐ南側は多々羅川に向けての排水管が入っているので、東側に移動して設定した。また、ここでは2



第12図 第26トレンチ～第32トレンチ 平面図・土層図

第26トレンチ～第31トレンチ

1	5Y R6/8橙色粘質土	
2	2.5Y7/1灰色粘質土	道路底土層
3	10Y6/1褐色粘質土	
4	2.5Y6/1灰黃色粘質土	
5	5Y7/1灰白色粘質土	
6	5Y7/1灰白色に10Y R6/2灰黃褐色が混じる粘質土(砂礫を含む)	
7	7.5Y R3/1黑褐色土	盛土
8	5Y R5/8白色赤褐色粘質土	
9	5Y7/2灰白色に10Y R3/2黑褐色が混じる粘質土(砂礫を含む)	
10	5Y7/2灰白色粘質土	
11	10Y R3/1黑褐色粘質土(微細な砂粒を含む)	
12	5Y R4/3にぶい赤褐色粘質土(砂粒を含む)	地山
13	2.5Y7/1灰白色に7.5Y R5/3にぶい褐色が混じる粘質土	
14	2.5Y6/1灰黃色に5Y R4/1灰褐色が混じる粘質土	旧耕作土
15	2.5Y7/1灰黃褐色に7.5Y R4/2褐褐色が混じる粘質土	
16	2.5Y6/2灰褐色に5Y R4/1灰褐色が混じる粘質土	
17	10Y R6/2灰黃褐色粘質土	
18	10Y R5/2灰黃褐色粘質土(砂粒を含む)	
19	5Y7/1灰白色に10Y R6/2灰黃色2.5Y R3/1黑褐色が混じる粘質土	
20	5Y7/1灰白色に7.5Y R3/1黑褐色が混じる粘質土	盛土
21	5Y R4/3にぶい赤褐色粘質土(砂粒を含む)	自然堆積層
22	2.5Y5/1灰色土(上層との間に隙層を含む)	
23	5Y6/1灰白色に10Y R3/1黑褐色が混じる隙層	
24	2.5Y6/1灰褐色に5Y7/1灰白色が混じる粘質土	
25	2.5Y6/1灰褐色に5Y7/1灰白色が混じる粘質土(砂粒を含む)	盛土
26	2.5Y6/1灰褐色に7.5Y R5/2灰褐色が混じる粘質土	
27	2.5Y5/1灰褐色粘質土	
28	2.5Y5/1灰褐色に7.5Y R3/1黑褐色が混じる粘質土	
29	10Y R4/1褐褐色粘質土(砂を含む)	
30	2.5Y5/2暗黄色粘質土	
31	5Y6/1灰白色に10Y R4/1灰褐色が混じる粘質土(砂礫を含む)	
32	5Y R3/1黑褐色に5Y R5/3にぶい赤褐色が混じる砂礫層	溝の堆土
33	5Y R3/1黒褐色に5Y R5/3にぶい赤褐色と5Y7/1灰白色が混じる砂礫層	
34	2.5Y5/1黄褐色砂礫層	自然堆積層
35	5Y R4/3にぶい赤褐色に10Y R3/1黑褐色が混じる粘質土	
36	5Y R5/3にぶい赤褐色粘質土	
37	2.5Y6/1灰褐色に5Y7/1灰白色が混じる粘質土	
38	5Y R5/2灰褐色に10Y R7/2にぶい灰褐色が混じる粘土	地山
39	5Y R4/2灰褐色に5Y R7/1黑色が混じる粘土	
40	10Y R7/2にぶい黄褐色に5Y R5/2灰褐色が混じる粘質土	
41	2.5Y6/2灰黃色粘質土	
42	2.5Y5/2暗黄色土	
43	7.5Y R4/1褐褐色に5Y6/2灰オリーブ色と10Y R5/2灰黃褐色が混じる粘質土(砂礫を含む)	
44	5Y6/2灰オリーブ色に10Y R5/2灰黃褐色が混じる粘質土	盛土
45	5Y6/2灰オリーブ色に10Y R5/2灰黃褐色と7.5Y4/1灰褐色が混じる粘質土	
46	7.5Y R4/1褐褐色に5Y7/1灰白色と7.5Y R3/1黑褐色が混じる粘質土	
47	7.5Y5/1灰褐色粘質土	
48	5Y6/2灰オリーブ色に10Y R4/2灰黃褐色が混じる粘質土	
49	5Y6/2灰オリーブ色に10Y R4/2灰黃褐色が混じる粘質土(砂を含む)	溝埋土
50	5Y7/2灰白色粘質土	
51	5Y7/2灰白色に10Y R5/2灰黃褐色が混じる粘質土	盛土
52	5Y6/2灰オリーブ色に10Y R5/2灰黃褐色が混じる粘質土	溝埋土
53	2.5Y5/1灰褐色粘質土	
54	2.5Y5/2灰褐色に5Y7 R6/6褐色とSY R3/2荷赤褐色が混じる粘質土	盛土
55	5Y7/2灰白色に7.5Y R4/2灰褐色が混じる粘質土(砂礫を含む)	溝埋土
56	7.5Y4/1褐褐色に5Y7/1灰白色が混じる粘質土	
57	7.5Y4/1褐褐色に5Y7/1灰白色と5Y R6/6荷赤褐色が混じる粘質土	盛土
58	5Y5/1灰褐色に5Y7/1灰白色が混じる粘質土	
59	7.5Y R3/1黑褐色粘質土	
60	5Y R6/6橙色に5Y R3/2暗赤褐色が混じる粘質土	地山
61	5Y R4/3にぶい赤褐色粘質土	道路底土層
62	2.5Y6/2灰黃色粘質土	

第32トレンチ

1	5Y7/1灰白色に7.5Y R8/4浅黃褐色が混じる粘質土	耕作土
2	5Y7/2灰白色に2.5Y R3/1黑褐色が混じる粘質土	旧耕作土
3	2.5Y8/8黄色に2.5Y R3/1黑褐色が混じる弱粘質土	
4	5Y R4/3にぶい赤褐色粘質土	
5	7.5Y R5/4にぶい褐色粘質土	地山
6	10Y R7/6明黄褐色粘質土	

つのトレントが接続しているので、まとめて1つのトレントとして扱い、報告を行う。

第26トレントの南端で、旧道と旧耕作地との境界として使われていた、コンクリート製の擁壁を検出した。このことから、第26トレントのT.P.約6.4m以上は、旧跡及び現道である。

土層12と13は、地山である。第27トレントでは、この地山を掘削し、形成した周濠外側斜面を検出した。また、地山の高さはT.P.約6.4m~6.5mであり、第28トレント~第32トレントの地山の高さより低い。これは、元々の地形が、三ツ岩谷川に向かって下降しつつあることや、削平を受けたことが考えられる。

27. 第28トレントと第29トレント (第12図、図版9・10)

前方部側の周濠形状を確認するために設定した。ただし、ここでは2つのトレントが接続しているので、まとめて1つのトレントとして扱い、報告を行う。

トレント北から約2m付近まで地山の土層12がT.P.約6.9mまで徐々に上がった。この傾斜角度は他の周濠の立ち上がり角度よりも緩やかではある。しかも、地山を掘削し形成している。これらのことから、周濠の外肩部に近いと考えた。

トレント北から約3m付近から幅約2m弱の溝も検出した。時代を特定しにくいが、第30トレントと第31トレントで検出した溝に繋がるものと考えられる。トレント南端付近では、地山が多々羅川に向けて下降し、土層34には、川原石と川砂が多量に出土した。この傾斜面の下がりきった高さと現在の多々羅川の河床の高さの差は、約0.1m程度である³⁾。

28. 第30トレントと第31トレント (第12図、図版10)

周濠の左入角を確認するために設定した。ただし、ここでは2つのトレントが接続しているので、まとめて1つのトレントとして扱い、報告を行う。

地山は削平を受けているが、元々T.P.約7m程度の高さはあったと考えられる。また、トレント南端付近では、多々羅川に向けて徐々に下降している。

トレント北端付近に計3本の溝を検出した。各溝とも地山を掘り込んで造られている。このうち真ん中の溝の埋土中から中世の土器片が出土している。この頃には埋没したと考えられる。また、これらは第28トレントと第29トレントで検出した溝に繋がると考えられるが、第26トレントと第27トレントでは検出しなかった。よって、どのような性格の溝かは不明である。

このトレントでは、当初は周濠の左入角を確認するために設定したが、古墳に直接関係する遺構は検出しなかった。このことから、周濠の左入角は、トレント北側の外にあると考えられる。

29. 第32トレント (第12図、図版10)

以前から、第1トレント~第3トレントの間の畦畔と、第8トレントと第9トレントの間の水路付近、及び市道丈六・渋野線は、周庭帯の可能性があると考えられた。そこで、富山大学理学部地球科学科に委託してレーダー探査を実施した。しかし、はっきりとした成果が上げられなかった。そのため、現道の外にあたる耕作地内で、周庭帯の有無等を確認するために設定した。

耕作土を約0.5m取り除いた下のT.P.約6.7mで水平な地山の土層4を検出した。また、遺構や遺物は検出しなかった。このことから、周濠の外肩部当たりの高さとほぼ変わりなく、しかも水平に近い地山を検出したことになる。さらには、他のトレントの結果からも、古墳に伴うと考えられる遺構が全く検出していない。以上のことから、周庭帯の可能性は低いと考えられる。

(註)

- 1) 平成14年11月11日～11月18日実施した。当時の全てのデータと資料は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センターが保管している。今後も追加の調査を行うということで、本報告書作成の段階では解析の詳細は不明である。
- 2) 徳島県立博物館の魚島純一氏の協力を得て、小型丸底壺の内部に固形の遺存しているものの有無を確認するため、X線撮影を行ったが何も映らなかった。その後内部に詰まっている土を取り除いて、土と壺の内部観察もしたが、何も検出しなかった。
- 3) 現在、このトレンチの南には、護岸用の擁壁が造られている。そのため、今回検出した傾斜面と日々堀川の河床が実際に繋がるかどうかは、確認できなかった。しかし、同じものであると推定される。

3. 出土遺物（第13図～第21図、図版11～20）

今年度までの発掘調査で出土した遺物は、コンテナ約70箱程の分量である。この内、ほとんどが埴輪で、僅かに2箱未満が土師器等であった。出土した埴輪は、墳丘及び周濠の墳丘付近での調査時に集中して出土した。今回円筒埴輪と朝顔形埴輪の図化にあたっては、整理作業を進める中で、遺存状態の良いものを優先的に抽出した。形象埴輪は、可能な限り図化した。本節では、円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪・土師器の順番で報告を行う。また、個々の遺物の計測値等は観察表として提示した。本節で用いる出土遺物の番号は、他の章と同様に、遺構平面図・実測図・図版で使用している番号と対応している。

1) 円筒埴輪（第13図～第19図、図版11～16）

①形態の特徴

口縁部の形状については、外反して端部に面をもたすもの（1、2、7～9、11、13～19、25、27、28、34、35、40～42、44～46）、逆L字状になっているもの（10、26、37、38）、直立するもの（33、36、39）に分類することができる。

口縁部径では、30cm前後のものと25cm前後のものに分類できる。

突帯の形状については、器壁の厚さとほぼ同じ高さで、台形である。また、各突帯間は、口縁部の高さとほぼ同じ間隔もある。

底部の直径は、43を除いて全て20cm前後である。

②調整の特徴

外面は1次調整はタテハケ、2次調整はB種ヨコハケである。内面は、指ナデと指オサエが多い。

③その他

透かし穴は、全て円形で2方向に穿孔される。しかし、穿孔位置は、特定できない。

線刻文は、円弧を組み合わせたものが多い。が、トレンチ毎の傾向等は、特定できない。

色調は、黄橙色系である。また、大半の埴輪には、黒斑が認められた。

底部底面には、外面から丸い棒状工具を突き入れた痕が残り、その痕をヘラ状工具でナデ消しているものが多い。

赤色顔料も多くの埴輪で確認できた。この内41の分析結果は、ベンガラであった¹¹。だが、全て個体外面に、赤色顔料を塗布していたかは、不明である。

以上のことから、川西編年Ⅲ期に属すると考えられる。

第4トレンチ出土の円筒埴輪（第13図1～6、図版11）

1～3と6は、崩れた葺石の間から出土した。

1は、口縁部を緩やかに外反させ、端部に面を持つ。また、線刻文を刻む。外面調整は、口縁部はヨコハケ後タテハケ、その下の段はタテハケ後ヨコハケ。内面調整は、口縁部はナナメハケ後タテハケ。胴部は、指オサエ、指ナデと、ヨコナデを施す。赤色顔料が塗布されている。2は、口縁部を緩やかに外反させ、端部に明瞭な面を持たない。また、線刻文を刻む。3～6は、底部である。4と5は、原位置を保って出土し、赤色顔料を塗布している。3～6の外面調整は、基本的には タテハケ後ヨコハケ。内面調整は、指オサエと指ナデを施す。また、3～5は、底部底面に外面から丸い棒状工具を突き入れた痕が残り、その痕をヘラ状工具でナデ消している。

第5トレンチ出土の円筒埴輪（第13図7～10、図版11）

7～10は、全て周濠埋土内からの出土した。

7は、口縁部を緩やかに外反している。端部は、面を持つ。外部調整は、口縁部はナナメハケ。端部付近はヨコナデ。胴部は、タテハケ後ヨコハケ。8の口縁部は直立する。口縁部の外面調整はヨコハケ後ナナメハケ、端部付近はヨコナデ。その後線刻文を刻む。赤色顔料を塗布している。9も、口縁部は直立する。口縁部の外面調整はタテハケ。10も、口縁部は直立する。ただし、端部は外反させた後、つまみ上げ、面をつくる。外面調整はタテハケ。

第6トレンチ出土の円筒埴輪（第14図11、12、図版11）

11と12は共に周濠埋土内から出土した。11は、口縁部を直立する。胴部3段目に透かし穴があり、口縁部に線刻文を刻む。12は、他の遺物と違い、透かし穴のある下段に線刻文を刻む。

第8トレンチ出土の円筒埴輪（第14図13～16、第15図17～24、図版12）

全て周濠埋土内からの出土した。13は、口縁部を直立し、線刻文を刻む。赤色顔料を塗布する。14は、口縁部を緩やかに外反し、線刻文を刻む。外面調整は、口縁部にタテハケ後ヨコハケ、胴部2段目にヨコハケ、底部にタテハケを施す。底部底面に外面から丸い棒状工具を突き入れた痕が残り、その痕をヘラ状工具でナデ消している。内面調整はナナメハケ後ヨコハケ。また、指ナデも施す。15は、口縁部を直立し、端部を外反させる。口縁部に線刻文を刻む。赤色顔料を塗布している。16は、口縁部を直立し、線刻文を刻む。17は、口縁部を緩やかに外反する。最上段の突帯の断面形は、三角形に近い台形の形をしている。赤色顔料を塗布する。18は、口縁部を緩やかに外反する。外面調整は、口縁部にタテハケ、胴部にヨコハケを施す。19は、口縁部を緩やかに外反し、端部に面を持つ。また、線刻文を刻む。赤色顔料を塗布する。外面調整は、口縁部にタテハケ後ヨコハケ、胴部にヨコハケを施す。内面調整は、口縁部にナナメハケ、胴部に指オサエと指ナデ後、板ナデを施す。20～24は、底部である。21を除く全ての底部底面には、外面から丸い棒状工具を突き入れた痕が残り、その痕をヘラ状工具でナデ消している。23は、赤色顔料を塗布が見られた。24は、底部に透かし穴がある。

第12トレンチ出土の円筒埴輪（第16図25～28、第17図29～34、第18図35～39、図版13～15）

25～29、31、32の底部は、埴輪列に原位置を保って出土した。

25～28の口縁部～胴部は、口縁部を下にして岩盤を平らに削った平坦面直上に置かれていた。

29、31、32は、底部は原位置を保って出土した。しかし、胴部は、埴輪列の南側の平坦面に、破片

として散乱していたものを、接合・復元した。

30、33~39は、崩れた葺石の間から出土しており、前方部頂平坦面の埴輪列から転落した可能性が考えられる。

25の口縁部は、緩やかに外反し、線刻文を刻む。2段目に透かし穴がある。外面調整はタテハケで、内面の口縁部はヨコハケ、胴部は指オサエと指ナデを施している。26の口縁部は、逆L字状にし、上と外の両側に面を持つ。口縁部に線刻文を刻む。2段目に透かし穴がある。外面調整は、口縁部にタテハケ、胴部にタテハケ・ナナメハケ、底部にナナメハケ・タテハケを施す。内面調整は、口縁部にナナメハケ、胴部・底部に指オサエ・指ナデを施す。27は、口縁部を外反している。端部は外に肥大させ面を持つ。口縁部に線刻文を刻む。3段目に透かし穴がある。外面調整は、口縁部にヨコハケ、胴部・底部にタテハケ後ヨコハケを施す。内面調整は、口縁部にヨコハケ。胴部・底部に指オサエ・指ナデを施す。28は、口縁部を緩やかに外反し、線刻文を刻む。外面調整は、口縁部にヨコハケ後タテハケ、胴部3段目にタテハケ後ヨコハケ、胴部2段目と底部にタテハケを施す。赤色顔料を塗布する。内面調整は、口縁部にヨコハケ、胴部・底部に指ナデを施す。29は、3段目を緩やかに外反させることから、口縁部にあたると考えられる。外面調整は、タテハケ後ヨコハケを施す。内面調整は、指オサエと指ナデを施す。赤色顔料を塗布する。底部底面に、外面から棒状工具と板状工具を突き入れた痕がある。30の底部横断面は円形であるが、2段目から緩やかに外反し始め、胴部横断面は楕円形になっている。このことから、円筒埴輪ではない可能性がある。底部底面に、外面から棒状工具を突き入れた痕がある。31は、底部にのみ円形に近い透かし穴がある。底部底面に、外面から太い棒状工具を突き入れた痕がある。外面調整は、タテハケ後ヨコハケ。内面調整は、指ナデを施す。32は、2段目に透かし穴がある。外面調整はタテハケ、内面調整は指ナデを施す。33は、直立する口縁部である。また、線刻文を刻む。34の口縁部は、直立させつつ、端部付近で大きく外反する。外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケを施す。35は、当初別個体として復元したが、図化・整理する中で、同一個体であると判断した。別個体として図化したものを、トレース時に1つの個体とした為、透かし穴と、線刻の位置関係は正確ではないことを記しておく。口縁部は直立し、線刻文を刻む。外面調整は、タテハケ後ヨコハケ。内面調整は、口縁部にヨコハケとヨコナデ、胴部に指ナデを施す。36の口縁部は、直立する。外面調整は、タテハケ後ナナメハケ。内面調整は、ナナメハケを施す。37は、口縁部を直立させ、端部を屈曲させ、面を持つ。円形の透かし穴あり。外面調整は、ヨコハケ。内面調整は、ナナメハケを施す。38は、口縁部を直立させ、端部を屈曲させ、上と横に面を持つ。口縁部に線刻文を刻む。外面調整は、タテハケ後ヨコハケ。内面調整は、指オサエと板ナデを施す。39の口縁部は、緩やかに外反する。線刻文を刻む。外面調整は、タテハケ後ヨコハケ。内面調整はナナメハケを施す。

第13トレンチ出土の円筒埴輪（第18図40、図版15）

周濠底の埋土内から出土した埴輪片のうち図化できたものを掲載した。人々、墳丘第1段平坦面に並べられていた埴輪と考えられる。

40の口縁部は、直立気味に立ち上がり、端部に面を持つ。2段目に円形の透かし穴あり。外面調整は、口縁部にナナメハケ、胴部にナナメハケ後ヨコハケ、底部にタテハケ後ヨコハケ。内面調整は、指オサエ・指ナデ・ナナメハケを施す。赤色顔料を塗布する。

第20トレンチ出土の円筒埴輪（第18図41、第19図42、図版15）

41と42は共に周濠底の埋土内から出土した。元々、墳丘第1段平坦面に並べられていた埴輪と考えられる。

41の口縁部は直立し、端部付近で大きく外反する。透かし穴を穿孔し、その横に線刻文を刻む。外面調整は、口縁部にタテハケ、胸部にヨコハケ。内面調整は、ナナメハケと指ナデを施す。内外面に赤色顔料を塗布する。42の口縁部は直立し、端部付近で外反し、面を持つ。2段目に円形の透かし穴があり、線刻文を刻む。外面調整は、ヨコハケ。内面調整は、口縁部にナナメハケ後ヨコハケ、胸部・底部に指オサエと指ナデを施す。

第21トレンチ出土の円筒埴輪（第19図43）

43は、墳丘第2段斜面の崩れた葺石の間から出土した。他に、小さな破片も出土したが、43のみ圓化した。43は、底部であるが、調整については、剥離のため、不明である。

第23トレンチ出土の円筒埴輪（第19図44～49、図版16）

44～46は、周濠埋土内から出土した。47～49は、墳丘第1段平坦面の埴輪列から原位置を保って出土した。

44は、口縁部を直立し、端部付近で屈曲し、面を持つ。外面調整は、ヨコハケ。内面調整は、口縁部にナナメハケ、胸部にナデを施す。赤色顔料を塗布する。45は、口縁部を直立し、端部の上に面を持つ。円形の透かし穴。その横に線刻文を刻む。46は、口縁部を緩やかに外反させ、端部の上に面を持つ。外面調整は、口縁部にヨコハケ後ナナメハケ、胸部にヨコハケを施す。内面調整は、口縁部にナナメハケを施す。赤色顔料を塗布する。47の底部底面に、外面から棒状工具を突き入れた痕と、それをヘラ状工具でナデ消した痕がある。外面調整は、タテハケとヨコナデ。内面調整は、ナデを施す。48の底部底面の一部に、板状工具によるケズリ整形が施されている。外面調整は、タテハケと、下部にヨコナデ。内面調整は、タテナデ、下部にヨコナデを施す。49の底部底面には、外面から板状工具を突き入れた痕と、ケズリの痕がある。外面調整は、タテハケ後一部ヨコハケ。内面調整は、ナデ。下部にヨコナデを施す。

2) 朝顔形埴輪（第20図50～54、図版17）

発掘調査により出土した朝顔形埴輪は、全て原位置を保って出土していない。

①調整の特徴

外面の調整は、口縁部にタテハケ、肩部にヨコハケ、胸部にヨコハケ後タテハケを施している。

内面の調整は、ヨコハケ後ナナメハケ、肩部・胸部はナデを施している。

②その他

透かし孔は、円形である。

色調は、黄橙色系である。また、黒斑も認められた。

線刻文は、円弧である。

赤色顔料も確認できた。この内51の分析結果は、ベンガラであった¹¹⁾。

第6トレンチ出土の朝顔形埴輪（第20図50、図版17）

50は、口縁部の破片である。口縁部突帯は、剥離している。一次口縁部の先端上面に、二次口縁部

を接合している。この接合面に刻み目を入れている。接合後突帯が付けられている。外面調整は、タテハケ、口縁端部と突帯にヨコナデを施す。内面調整は、ナナメハケとヨコハケを施す。

第8トレンチ出土の朝顔形埴輪（第20図51、図版17）

51は、口縁部～胴部が遺存している。肩部に、線刻文を刻む。外面に赤色顔料を塗布している。これを徳島県立博物館の協力により分析を行い、ベンガラと確認できた。外面調整は、口縁部はタテハケ、口縁端部と突帯はヨコナデを施す。肩部にヨコハケ、胴部にヨコハケ後タテハケを施す。内面調整は、口縁部にヨコハケ後ナナメハケ、肩部・胴部には指ナデを施す。

第12トレンチ出土の朝顔形埴輪（第20図52～54）

52は、肩部～胴部の破片である。外面調整は、肩部にヨコハケ後ナナメハケ、胴部にタテハケを施す。内面調整は、肩部にナナメナデ、胴部にナデを施す。53は、二次口縁部の破片である。外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケを施す。54は、肩部の破片である。外面調整は、ヨコハケを施す。53と54の外面には、赤色顔料を塗布している。

3) 形象埴輪（第20図、第21図、図版18、図版19）

ほとんどの埴輪の表面が剥離や磨滅のため、調整方法は不明である。線刻が分かるのみと言つても過言ではない。

55～57は、剥落した痕がある。鱗の可能性がある。

58、59、61、62、63、66は、家形埴輪になる可能性が高いと思われる。

67は、蓋形の傘部になる可能性がある。

68は、突出部の遺存している側は、ハケメがよく残っている。しかし、反対側の面は、剥離していることもあり、ハケメはほとんど確認できなかった。突出部の痕跡はこの面にもある。舟形埴輪の可能性がある。

69は盾形埴輪になる可能性がある。70と73は盾形埴輪又は韌形埴輪、71と72は、韌形埴輪又は甲冑形埴輪になる可能性がある。

71と72は、同一の可能性がある。72には、赤色顔料のベンガラが確認できた¹⁾。

4) 土師器（第21図、図版20）

74と75は、内外面ともに調整は不明である。出土地点はトレンチ5の北側で、トレンチ18付近である。

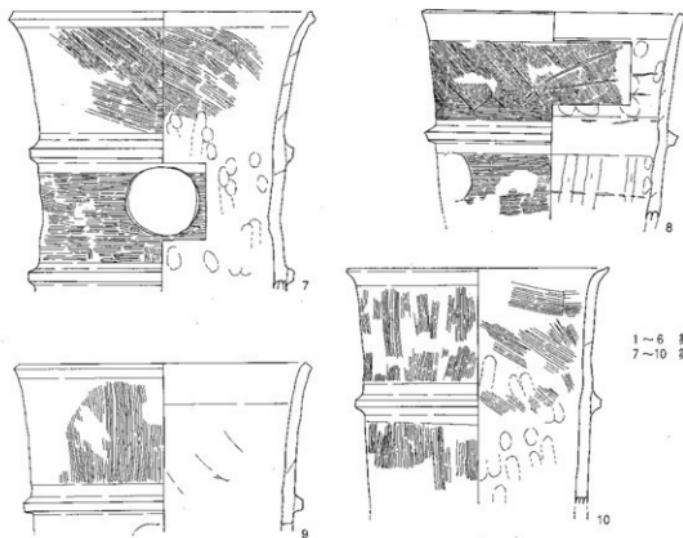
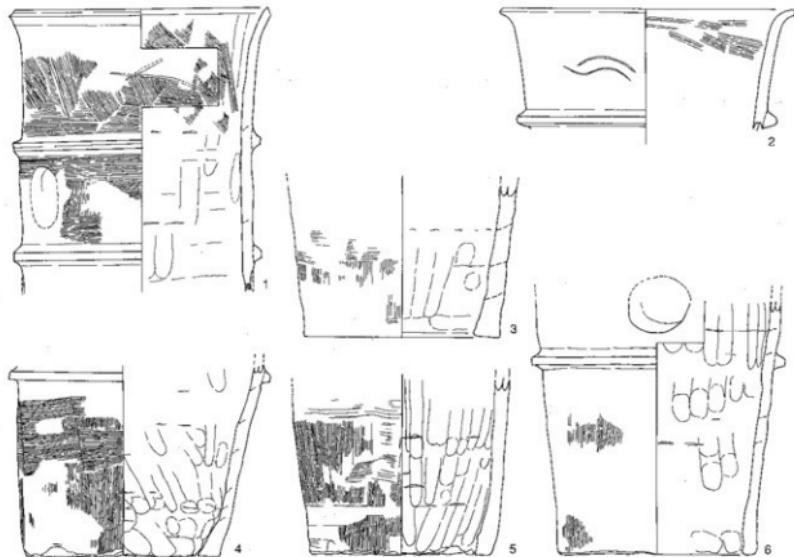
76も、内外面ともに調整は不明である。出土状況は、墳丘第1段平面に口縁部を下にしていた。

77は、外面はタテハケとヨコナデ、内面はヨコナデである。造り出しの斜面直上で、以下の小型丸底壺同様、崩れた葺石の間で出土した。

78～84は、内外面共に磨滅が著しく調整不明瞭である。部分的に残っている調整を観察すると、口縁部外面はヨコナデ、体部はハケとミガキを施している。口縁部内面はヨコナデ、体部はナデを施している。年代的には、形から5世紀頃に比定できる。

(註)

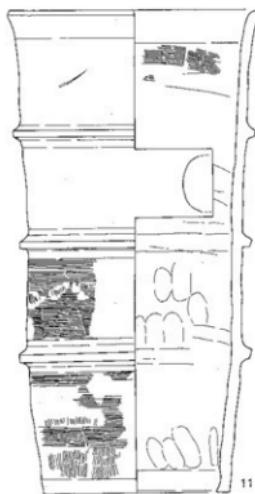
1) 41、51、72の赤色顔料の分析については、徳島県立博物館の魚島純一氏にご協力いただいた。



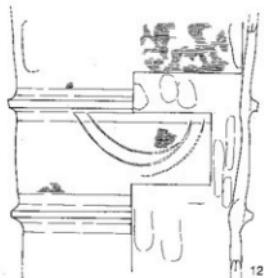
1~6 第4トレンチ
7~10 第5トレンチ

0 2.5cm
(1:5)

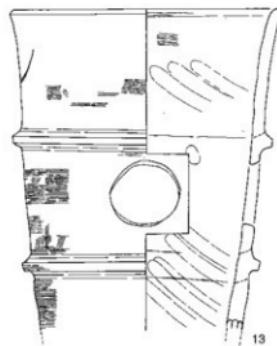
第13図 第4トレンチ・第5トレンチ出土の埴輪



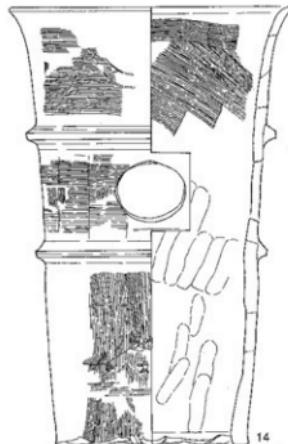
11



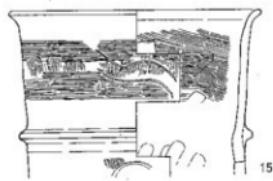
12



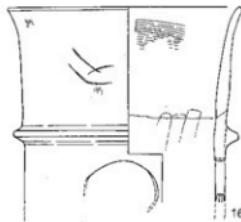
13



14



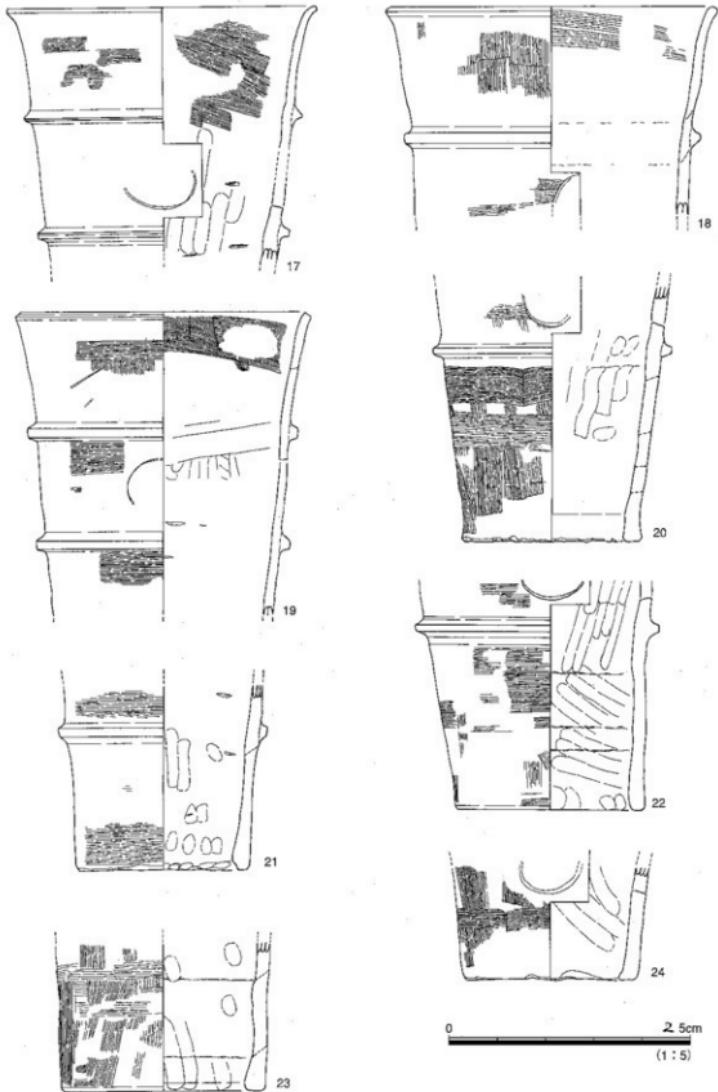
15



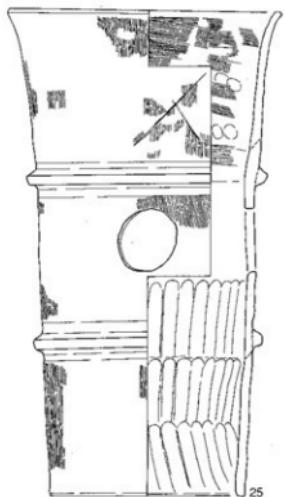
11~12 第6トレンチ
13~16 第8トレンチ

0 2.5cm
(1:5)

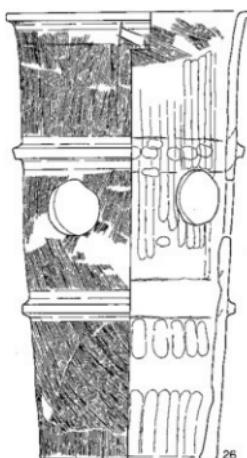
第14図 第6トレンチ・第8トレンチ出土の埴輪



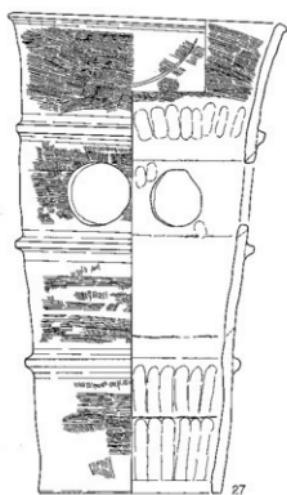
第15図 第8トレンチ出土の埴輪



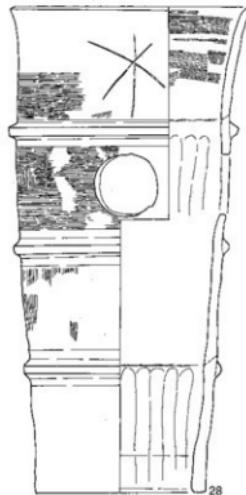
25



26



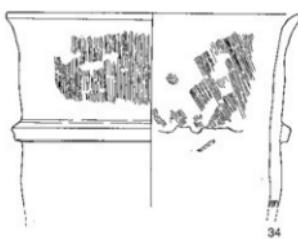
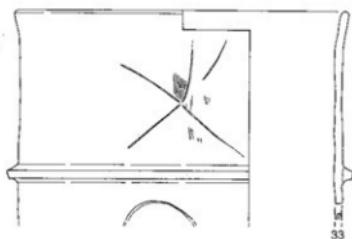
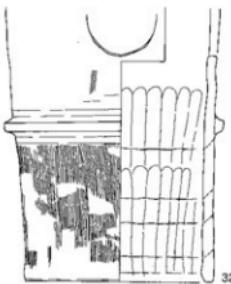
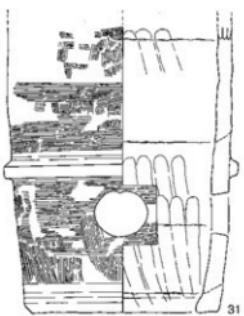
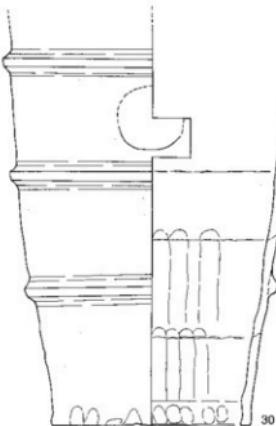
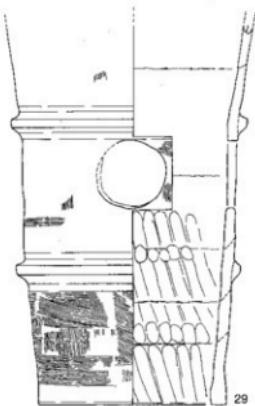
27



28

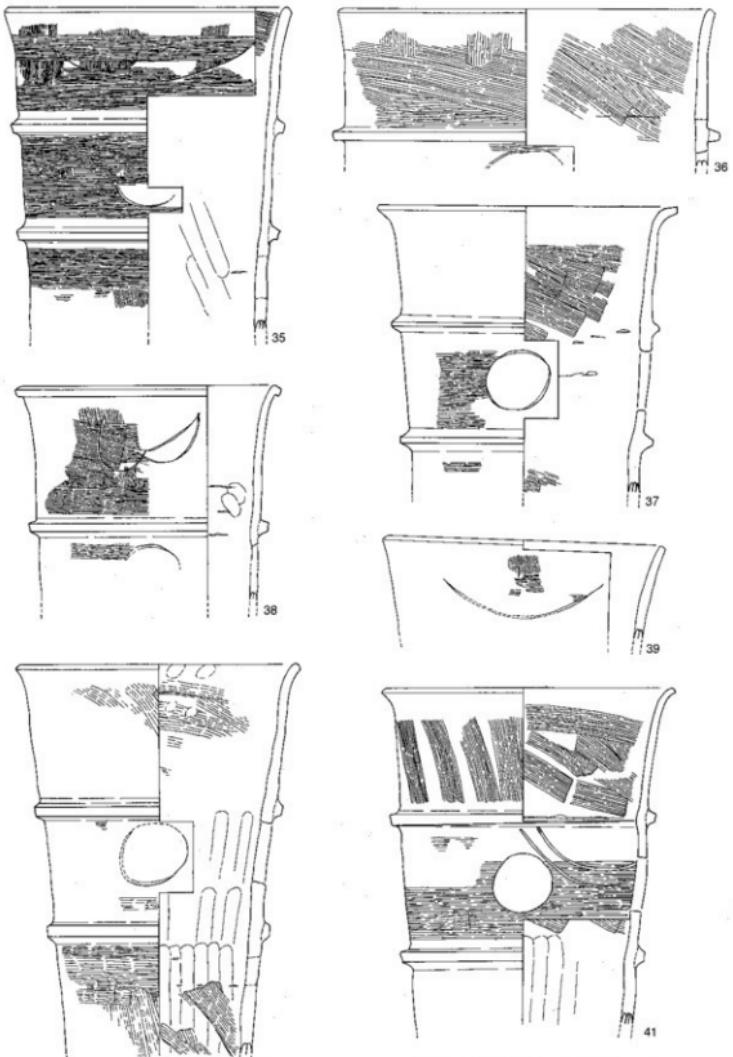
0 2.5cm
(1 : 5)

第16図 第12トレンチ出土の埴輪



0 2.5cm
(1 : 5)

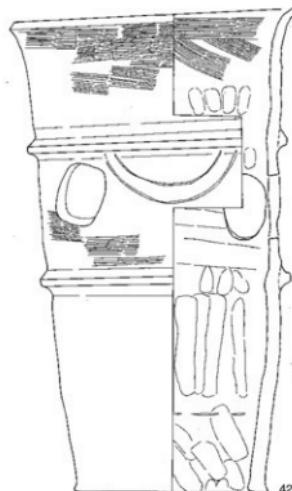
第17図 第12トレンチ出土の埴輪



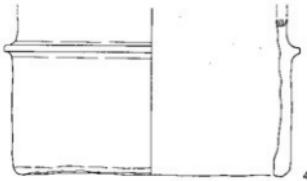
35~39 第12トレンチ
40 第13トレンチ
41 第20トレンチ

0 2.5cm
(1:5)

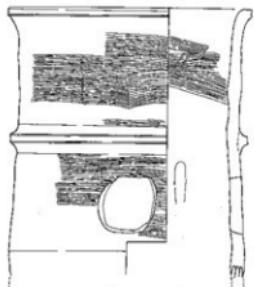
第18図 第12トレンチ・第13トレンチ・第20トレンチ出土の埴輪



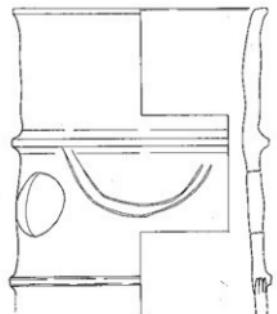
42



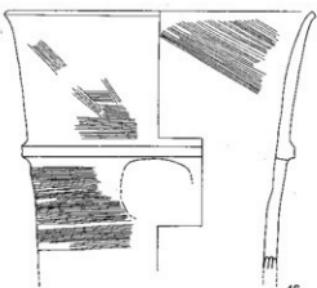
43



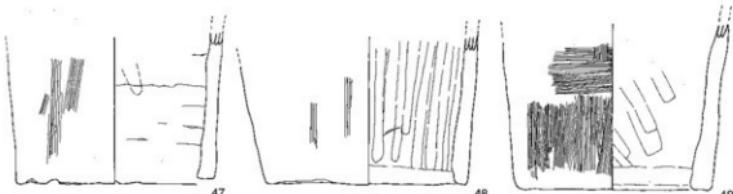
44



45



46



47

48

49

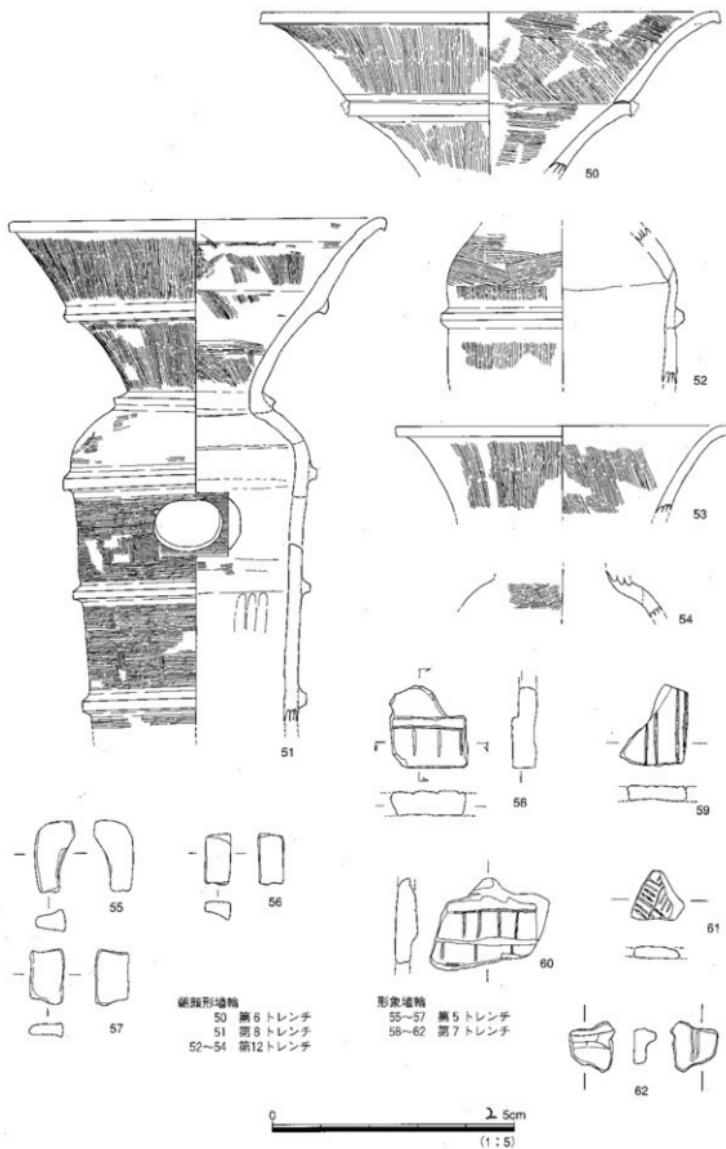
42 第20トレンチ

43 第21トレンチ

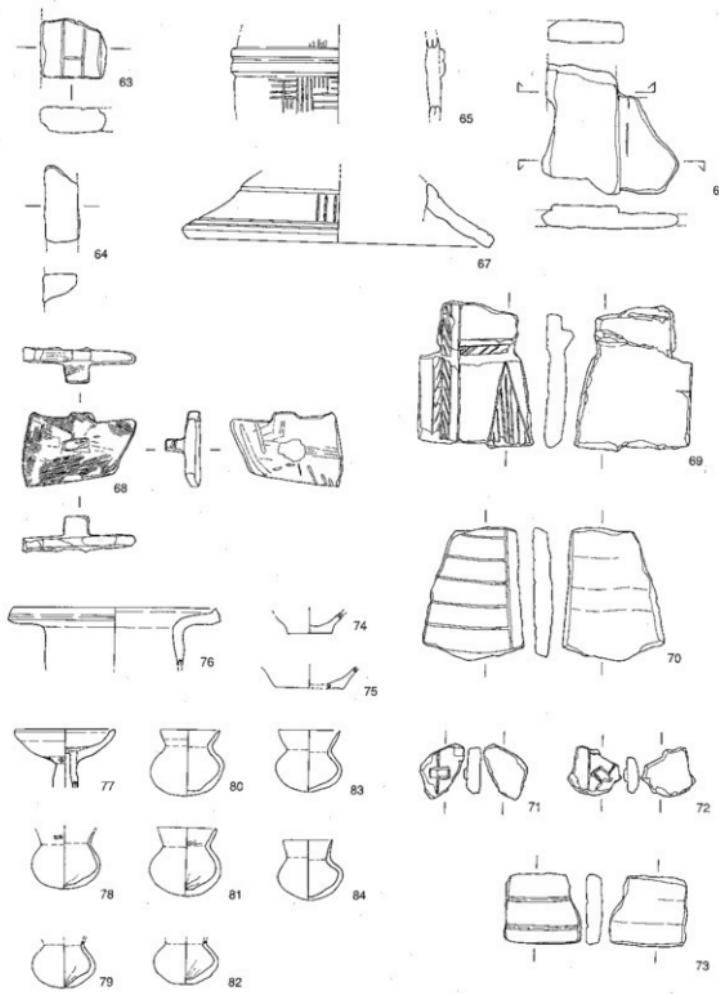
44~49 第23トレンチ

0 2.5cm
(1 : 5)

第19図 第20トレンチ・第21トレンチ・第23トレンチ出土の埴輪



第20図 第5トレンチ～第8トレンチ・第12トレンチ出土の埴輪



形象埴輪

63~67 第7トレンチ
68 第17トレンチ
69~73 第22トレンチ

土師器

74~75 第5トレンチ
76 第12トレンチ
77~84 第19トレンチ

0 2.5cm
(1:5)

第21図 第7トレンチ・第17トレンチ・第22トレンチ出土の埴輪、第5トレンチ・第12トレンチ・第19トレンチ出土の土師器

出土遺物観察表（図版の空欄は、写真図版がないものである）

1. 円筒埴輪

番号	種類	出土トレンチ (残存高)	口縁部		底 部		突 帯		平均 器厚	燒 成	色 調	透かし穴 穿孔箇所	黒斑 有無	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考		
			直径	高さ	直径	高さ	底面の工具痕	間隔										
1 13	4	口縁部～ 胴部 (29.1)	25.8	12.0	—	—	—	—	11.6 0.9	0.8 1.1	良	灰褐色	円形	あり	口縁部、ヨコハケ 後ナメハケ 胴部、タテハケ後 ヨコハケ	口縁部、ナメハケ 後タテハケ 胴部、指オサエと 指ナデとヨコナデ	線刻文 接合痕 赤色顔料塗布	
2	11	口縁部 (12.3)	29.4	12.3	—	—	—	—	1.3	1.1	良	黄褐色	—	—	剥離のため不明	ヨコハケ	線刻文	
3		底部 (15.6)	—	—	19.8	—	棒状工具痕	—	—	1.6	良	黄褐色	—	—	タテハケ後ヨコハケ	指オサエと指ナデ	接合痕	
4	11	底部 (19.8)	—	—	19.8	17.6	棒状工具痕	—	0.8	1.2	良	にぶい橙色	—	—	タテハケ後ヨコハケ	指オサエ 指ナデ	接合痕 赤色顔料塗布	
5	11	底部 (18.5)	—	—	18.6	—	棒状工具痕	—	—	1.3	良	浅黄褐色	—	あり	タテハケ後ヨコハケ	指オサエ 指ナデ	接合痕 地輪列から出土 棒状工具によるナデ	
6		底部 (26.0)	—	—	19.6	18.9	—	—	1.1	1.1	良	黄褐色	円形 2段目	あり	タテハケ	指オサエ 指ナデ	接合板	
7	11 5	口縁部～ 胴部 (28.8)	30.4	13.2	—	—	—	—	13.0	0.9	1.2	良	にぶい黃褐色	円形	あり	口縁部…ナメハケ とヨコナデ 胴部…タテハケ後 ヨコハケ	口縁部…ナメハケ とヨコナデ 胴部…指オサエと ナデ	接合痕
8		口縁部～ 胴部 (21.3)	25.7	11.6	—	—	—	—	1.1	1.1	良	浅黄褐色	円形	—	口縁部…ヨコハケ 後ナメハケ 口縁部…ヨコナデ 胴部…タテハケ後 ヨコハケ	指オサエ 指ナデ	線刻文 接合痕 赤色顔料塗布	
9		口縁部 (17.2)	29.3	13.5	—	—	—	—	0.9	1.1	良	黄褐色	円形	—	タテハケ	ナナメケズリ	接合痕	
10		口縁部 (24.1)	27.0	12.8	—	—	—	—	1.1	1.1	良	浅黄褐色	—	—	タテハケ	ヨコハケ後ナデ ナナメハケ後指オ サエ・留ナデ		
11 14 12	6	口縁部～ 底部 49.5	25.4	11.8	18.8	13.0	—	—	11.2 11.3	1.0 1.0 0.8	1.1	やや良	黄褐色	円形 3段目	あり	タテハケ後ヨコハケ ナナメケズリ ヨコナデ	指オサエ後ヨコハケ ナナメケズリ ヨコナデ	線刻文 接合板
12		胴部 (25.8)	—	—	—	—	—	—	11.3	0.9	1.0	やや良	黄褐色	円形	—	タテハケ後ヨコハケ 磨滅のため不明	線刻文 一部指オサエ重存	
13 12	8	口縁部 (32.9)	27.1	12.2	—	—	—	—	12.5	—	1.2	良	にぶい橙色	円形	あり	ヨコハケ後タテハケ ヨコハケ	指オサエ 指ナデ	線刻文 接合痕 赤色顔料塗布
14	12	口縁部～ 底部 45.0	28.7	12.0	19.6	18.7	棒状工具痕	12.1	1.3 1.0	1.2	良	浅黄褐色	円形 2段目	あり	口縁部…タテハケ 後ヨコハケ 胴部…ヨコハケ 底部…タテハケ後 ヨコハケ	ナナメハケ後ヨコ ハケ 指ナデ	線刻文 接合痕	
15		口縁部 (16.5)	25.4	—	—	—	—	—	—	1.0	良	浅黄褐色	—	—	タテハケ後ヨコハケ	ヨコハケ	線刻文 赤色顔料塗布	
16	12	口縁部 (20.0)	23.3	12.0	—	—	—	—	1.3	1.1	良	浅黄褐色	円形	あり	磨滅のため不明 口縁部の一部にタテ ハケ重存	ナナメハケ 指オサエ 指ナデ	接合痕 線刻文	
17 15		口縁部～ 胴部 (26.0)	31.2	10.3	—	—	—	—	11.8 1.2	1.2 1.0	1.0	良	にぶい赤褐色	円形	あり	ヨコハケ 磨滅のため不明	ナナメハケ 指ナデ	接合痕 赤色顔料塗布
18		口縁部 (21.4)	33.0	12.4	—	—	—	—	—	1.0	1.1	良	浅黄褐色	円形	—	タテハケとヨコハケ	口縁部の一部にナ ナメハケ 磨滅のため不明	接合痕
19		口縁部～ 胴部 (31.0)	29.2	11.2	—	—	—	—	11.4 1.0	0.9 1.0	1.0	良	黄褐色	円形	あり	口縁部…タテハケ 後ヨコハケ 胴部…指オサエと ヨコハケ	口縁部…ナナメハケ 胴部…指オサエと 指ナデ後、板ナデ 下部は、磨滅のた め不明	接合痕 線刻文 赤色顔料塗布

番号	機団	出土レ ンチ (残存高)	口縁部		底 部		突 個		平均 高さ	焼 成	色 調	透かし穴 穿孔箇所	黒斑 有無	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考		
			直徑	高さ	直徑	高さ	底面の工具痕	調査										
20	15	8	脚部～ 底部 (26.6)	—	—	17.8	18.9	棒状工具痕	—	1.1	1.3	良	浅黄橙色	円形 2段目	あり	タテハケ後ヨコハケ 底部端部ヨコナデ	指オサエ 指ナデ 底部端部に強い指 オサエ	接合痕
21			脚部～ 底部 (18.0)	—	—	17.2	12.9	—	—	0.8	1.1	良	黄橙色	—	—	ヨコハケ	指オサエ 指ナデ 底部端部に強い指 オサエ	接合痕
22		12	底部 (23.5)	—	—	18.8	17.6	棒状工具痕	—	—	1.3	良	浅黄橙色	円形	あり	ヨコハケ後タテハケ	指オサエ 指ナデ	接合痕
23			底部 (15.1)	—	—	20.0	—	棒状工具痕	—	—	1.4	良	黄橙色	—	あり	タテハケ後ヨコハケ	指オサエ 指ナデ	接合痕 赤色顔料塗布
24			底部 (11.5)	—	—	17.0	—	棒状工具痕	—	—	1.3	良	浅黄橙色	円形 底部	あり	タテハケ後ヨコハケ 底部端部ヨコナデ	指ナデ 底部端部ヨコナデ	
25	16	13	口縁部～ 底部 50.0	27.3	15.8	19.8	15.0	棒状工具痕	14.0	1.0	0.9	良	黄橙色	円形 2段目	あり	口縁部…タテハケ ヨコハケ	指オサエと指ナデ	接合痕 縦刻文 底部に粘土塗 合わせ跡
26		13	口縁部～ 底部 46.0	25.0	13.3	18.0	14.5	棒状工具痕	14.0	0.9	1.0	良	橙色	円形 2段目	あり	III縁部…タテハケ 削部…タテハケ ナナメハケ 底部…ナナメハケ ・タテハケ	ナナメハケ 指オサエ 指ナデ	接合痕
27		13	口縁部～ 底部 49.1	27.0	11.0	18.6	12.0	—	10.0	0.8	1.0	良	黄橙色	円形 3段目	あり	II縁部…ヨコハケ 削部…タテハケ後 ヨコハケ 底部…タテハケ後 ヨコハケ	ヨコハケ 指オサエ 指ナデ	接合痕 縦刻文
28		14	口縁部～ 底部 49.75	24.0	11.5	17.4	10.5	棒状工具痕	10.1	0.9	1.1	良	橙色	円形 3段目	あり	III縁部…ヨコハケ 後タテハケ 削部3段目…ヨコ ハケ後タテハケ 削部2段目…底部 …タテハケ	ヨコハケ 指ナデ	接合痕 赤色顔料塗布
29	17	14	脚部～ 底部 (38.95)	—	—	19.0	12.5	棒状工具痕 ・板状工具 痕	12.5	0.9	1.0	良	浅黄橙色	円形 2段目	あり	タテハケ後ヨコハケ	指オサエと指ナデ	接合痕 赤色顔料塗布 底部に粘土塗 合わせ跡
30		14	脚部～ 底部 (41.0)	—	—	20.4	13.0	棒状工具痕	9.0	0.8	0.9	良	黄橙色	円形 3段目	あり	磨滅のため不明	指オサエ 指ナデ	接合痕 底部の横断面 は円形である が、削部の横 断面は梢円形 になる。
31		14	脚部～ 底部 (29.3)	—	—	18.8	13.6	太い棒状工 具痕	—	0.9	1.7	良	にぼい黄橙色	円形 底部	あり	タテハケ後ヨコハケ	指ナデ	接合痕
32		15	脚部～ 底部 (28.0)	—	—	19.1	15.0	板状工具痕	—	1.0	1.1	良	浅黄橙色	円形 2段目	あり	タテハケ	指ナデ	接合痕
33			口縁部～ 削部 (21.4)	33.4	15.8	—	—	—	—	1.1	0.8	不良	浅黄橙色	円形	—	タテハケ	磨滅のため不明	接合痕 縦刻文
34			口縁部～ 削部 (19.8)	30.0	10.9	—	—	—	—	1.0	1.1	良	にぼい黄橙色	—	—	タテハケ	ナナメハケ	接合痕
35	18		口縁部～ 削部 (26.0)	26.4	11.2	—	—	—	11.1	1.1	0.9	良	橙色	—	—	タテハケ後ヨコハケ	ヨコハケ ヨコナデ 指ナデ	接合痕 縦刻文

番号	種類	寸法	形状部品名 トレンチ	直径 高さ (残存高)	口縁部	底 部	突 部	平均 厚	成 形	色 調	透かし穴 穿孔場所	黒斑 有無	外 面 調整	内 面 調整	備 考	
36		12	口縁部～ 胴部 (16.0)	37.4 11.1	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	橙色	円形	あり	タテハケ後ヨコハケ	ナナメハケ	接合痕
37			口縁部～ 胴部 (29.3)	30.6 11.6	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	浅黄橙色	円形	あり	ヨコハケ	ナナメハケ	接合痕
38			口縁部～ 胴部 (22.0)	25.8 13.6	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	明黄褐色	円形	あり	タテハケ後ヨコハケ	指サエ 板ナデ	接合痕 線削り
39	18		口縁部 (9.0)	28.2	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	橙色	一	あり	タテハケ後ヨコハケ	ナナメハケ	接合痕 線削り
40	15	13	口縁部～ 底部 40.0	28.2 14.1	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	黄橙色	円形 2段目	あり	口縁部…ナナメハケ 胴部…ナナメハケ 後ヨコハケ 底部…タテハケ後 ヨコハケ	指サエ・指ナデ ・ナナメハケ	接合痕 底部の下部欠損 赤色顔料塗布
41	15	20	口縁部～ 胴部 (30.1)	29.4 12.5	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	浅黄橙色	円形	あり	口縁部…タテハケ 胴部…ヨコハケ	ナナメハケ・指ナデ	接合痕 線削り 内外側に赤色 顔料塗布
42	19	15	口縁部～ 底部 49.5	28.5 12.0	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	浅黄橙色	円形 2段目	あり	ナナメハケ後ヨコ ハケ	ナナメハケ指ナデ ・指サエ	接合痕 線削り 赤色顔料塗布
43		21	胴部～ 底部 (16.0)	—	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	淡橙色	—	—	剥離のため不明	剥離のため不明	
44		23	口縁部～ 胴部 (27.5)	25.0 12.2	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	浅黄橙色	円形	あり	口縁部端部と突部 …ヨコナデ 口縁部～胴部…ヨ コハケ 口縫部…ナナメハケ 剥離…縱方向ナデ	口縁部端部と突部 …ヨコナデ 口縫部…ナナメハケ 剥離…縱方向ナデ	赤色顔料塗布
45	16		口縁部～ 胴部 (29.5)	26.0 12.5	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	浅黄橙色	円形	あり	L口縫部端部と突部 …ヨコナデ 他は剥離のため不明	剥離のため不明	線削り 赤色顔料塗布
46			口縁部～ 胴部 (26.4)	32.0 13.2	直徑 高さ	直徑 高さ	底面の工具痕	突部 厚	成形 厚	良	浅黄橙色	円形	あり	口縫部端部…ヨコ ナデ 口縫部…ヨコハケ 後ナナメハケ 胴部…ヨコハケ	口縫部…ナナメハケ 剥離…纵方向ナデ	赤色顔料塗布
47	16		底部 (15.5)	—	直徑 高さ	直徑 高さ	一部に板状 工具でケズ り整形	—	直徑 高さ	良	浅黄橙色	—	—	タテハケ ヨコナデ	ナデ	接合痕
48	16		底部 (15.5)	—	直徑 高さ	直徑 高さ	一部に板状 工具でケズ り整形	—	直徑 高さ	良	浅黄橙色	—	あり	タテハケ 下部はヨコナデ	線方向ナデ 下部はヨコナデ	接合痕
49	16		底部 (17.0)	—	直徑 高さ	直徑 高さ	板状工具に よる剥離痕 ケズリ	—	直徑 高さ	良好	浅黄橙色	—	あり	タテハケ後…部ヨ コハケ	ナデ 下部はヨコナデ	突部の剥離痕

2. 朝顔形埴輪

番号	埋 込 図 版 シ ン チ	出土 トレン チ	残存部位	口縁部 直径	頭部 直徑	頸部 直徑	肩部 直徑	底部 高さ	突 き 帶 間隔	平均 器厚	焼 成	色 調	活かし穴 穿孔箇所 有無	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考	
50	20	17	6 口縁部～ 胸部	46.5	—	—	—	—	—	1.1	良	灰黄褐色	—	あり タテハケ	ナナメハケ ヨコナデ		
51		17	8 口縁部～ 胸部	37.8	17.5	13.8	22.0	—	—	①9.5 ②7.1 ③6.7 ④6.3 ⑤6.3 ⑥6.9	1.3	良	浅黄褐色	円形 肩部	あり 山縁部…タテハケ 肩部…ヨコハケ 頭部…ヨコハケ後 タテハケ	口縁部…ヨコハケ 後ナナメハケ 肩部・胸部…指ナデ 赤色顔料塗布	接合痕 織割文
52			12 肩部～ 胸部	—	—	—	23.0	—	—	—	1.3	良	橙色	—	—	接合痕	
53			口縁部	33.9	—	—	—	—	—	—	1.0	良	にぼい橙色	—	— タテハケ	ナナメハケ	接合痕 赤色顔料塗布
54			肩部	—	—	—	—	—	—	—	1.3	良	橙色	—	あり ヨコハケ	磨滅のため不明	接合痕 赤色顔料塗布

(注) 突き帶の①は2次口縁部の高さを②は1次口縁部の高さを③は肩部突帯～胸部上段の突帯の間隔を④は胸部上段の突帯～胸部下段の突帯の間隔をそれぞれ表す。

突帯の高さは、①は口縁部突帯の高さ、②は肩部突帯の高さ、③は胸部上段の突帯の高さ、④は胸部下段の突帯の高さをそれぞれ表す。

3. 形象埴輪

番号	埋 込 図 版 シ ン チ	出土 トレン チ	器種	残存高	平均器厚	焼成	色調	黒斑 有無	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考	
55	20		不明	—	—	7.3	1.0～2.2	良	淡黄褐色	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明
56		5	不明	—	—	5.6	0.9～1.4	良	淡黄色	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明
57			不明	—	—	5.3	0.9～1.8	良	にぼい黄色	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明
58		18	7 不明	—	—	8.3	1.8～2.2	良	浅黄褐色	—	剥離のため不明	剥離のため不明
59			家形埴輪	—	—	8.2	1.4	良	灰褐色	—	剥離のため不明	剥離のため不明
60		18	駆形埴輪	—	—	9.6	2.2	良	浅黄褐色	—	ナデ	剥離のため不明
61			不明	—	—	5.0	1.1	良	浅黄褐色	—	剥離のため不明	剥離のため不明
62			家形埴輪	—	—	5.3	1.4	良	橙色	—	剥離のため不明	剥離のため不明
63	21		不明	—	—	6.0	2.5	良	浅黄褐色	—	剥離のため不明	剥離のため不明
64		18	不明	—	—	7.8	1.2～3.0	良	浅黄褐色	—	剥離のため不明	剥離のため不明
65			不明	—	—	8.0	1.3	良	浅黄褐色	—	剥離のため不明	ナデ
66			不明	—	—	13.4	1.5～2.2	良	浅黄褐色	—	ナデ	ナデ
67			蓋形の傘部	—	—	6.5	1.3	良	浅黄褐色	—	剥離のため不明	ナデ
68		17	舟形埴輪	—	—	3.6	1.5	良	橙色	—	ハケ	剥離のため不明
69		22	眉形埴輪	—	—	15.0	1.8	良	にぼい橙色	—	剥離のため不明	残存する長さ…7.7
70		19	眉形埴輪又は鶴形埴輪	—	—	13.6	2.0	良	にぼい黄褐色	—	剥離のため不明	剥離のため不明
71		19	駆形埴輪又は甲骨形埴輪	—	—	5.7	1.3	良	浅黄褐色	—	剥離のため不明	剥離のため不明
72		19	駆形埴輪又は甲骨形埴輪	—	—	5.1	1.1	良	浅黄褐色	—	剥離のため不明	T2と同一の可能性あり
73			眉形埴輪又は鶴形埴輪	—	—	7.3	1.6	良	橙色	—	剥離のため不明	T3と同一の可能性あり

(計測値の単位はcm)

4. 土師器

番号	捕獲 図版 出土地 トレンチ	器種	残存部位	口径	胴部 直径	高さ (底面高)	底盤	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
74	21	5 臺	底部	—	(2.1)	4.4	結晶片岩~0.4 石英 ~0.3	良	にぶい 黄橙色	磨滅のため不明	ナデ?		
75			臺	底部	—	(2.3)	6.8	石英 ~0.15	良	褐色	ナデ?	ナデ	
76	20	12 広口壺	口縁部	20.5	(6.0)	—	結晶片岩~0.3 石英 ~0.4 赤色斑紋~0.12 雲母 ~0.05	良	浅黄褐色	剥離のため不明	剥離のため不明	内外面に炭化物	
77			高杯	口縁部~ 脚部	10.1	(6.0)	—	結晶片岩~0.3 石英 ~0.15 雲母 ~0.15 赤色斑紋~0.19	良	浅黄褐色	タテハケ ヨコナデ	ヨコナデ	絞り目
78	20	小型丸 底壺	口縁部~ 底部	5.7	6.9	5.9	—	結晶片岩~0.4 石英 ~0.2 赤色斑紋~0.1	良	にぶい 黄橙色	口縁部:ヨコハ ケ後ヨコナデ 体部:ハケ後ミ ガキ	ヨコナデ	絞り目 内外面磨滅著し く調整不明瞭
79			小型丸 底壺	頭部~底部	—	6.4	(4.8)	—	結晶片岩~0.4 石英 ~0.4 赤色斑紋~0.1	良	にぶい 黄橙色	一部ミガキ	ナデ
80	20	小型丸 底壺	口縁部~ 底部	5.8	7.5	6.8	—	結晶片岩~0.3 石英 ~0.2 赤色斑紋~0.3	良	にぶい 黄橙色	口縁部:ヨコナデ 体部:ヨコハケ 後ナデ	ヨコナデ 体部:板ナデ	黒斑あり
81			小型丸 底壺	口縁部~ 底部	5.8	7.3	7.0	—	結晶片岩~0.3 石英 ~0.2 赤色斑紋~0.25	良	にぶい 黄橙色	口縁部:ヨコナデ 口縁部の一部に ヨコハケ	ヨコナデ
82	20	小型丸 底壺	頭部~底部	—	6.6	(4.2)	—	結晶片岩~0.35 石英 ~0.15 赤色斑紋~0.1	良	にぶい 黄橙色	ナデ	ナデ	絞り目 内外面磨滅著し く調整不明瞭
83			小型丸 底壺	口縁部~ 底部	6.2	6.8	6.3	—	結晶片岩~0.2 石英 ~0.12 赤色斑紋~0.15	良	にぶい 黄橙色	磨滅のため調整 不明	体部:板ナデ 口縁部:ナデ
84	20	小型丸 底壺	口縁部~ 底部	5.0	6.6	5.0	—	結晶片岩~0.2 石英 ~0.2 赤色斑紋~0.2	良	にぶい 黄橙色	ナデ?	口縁部:ナデ 体部:板ナデ	黒斑あり 内外面磨滅著し く調整不明瞭

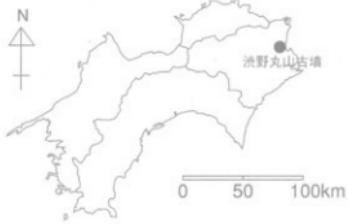
地中レーダー探査による徳島市渋野丸山古墳の規模と主体部の研究

岸田 徹（富山大学大学院理工学研究科）
福富雅男（富山大学理学部）
酒井英男（富山大学理学部）

はじめに

徳島県徳島市の渋野町に所在する渋野丸山古墳は、全長約105m、高さは約10mあり、四国地方において2番目の規模を誇る前方後円墳である（第22図）。出土遺物からは、古墳の築造時期は5世紀前半頃と考えられている。また、古墳の墳丘は三段からなり、造り出しを持っている。この古墳の特徴から、同古墳は、近畿地方と深いつながりを持つ強大な権力者の墓の可能性も指摘され注目されている。

本研究では、渋野丸山古墳において、周濠を捉えて古墳の規模を推定すること、および埋葬施設の位置と大きさを推察することを目的として地中レーダー探査を行った（写真1）。



第22図 徳島市渋野丸山古墳の位置



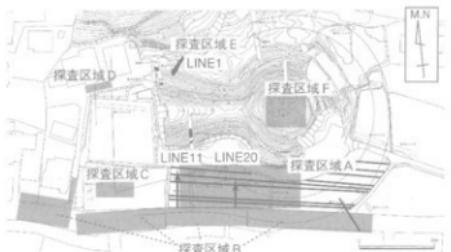
写真1. 古墳後円部上での地中レーダー探査風景

探査の概要

探査は2005年6月7、8日と7月23、24日に実施した。使用した装置はカナダ Sensors & Software 社製 Noggin Plus であり、アンテナ周波数としては250MHzと500MHzを採用した。

第23図には、探査範囲を示している。周濠の範囲と形状の調査は、図のAからEの範囲で行った。古墳南側の果樹園（探査区域A）と道路上（探査区域B）の範囲では、南北方向の探査測線を約1m～2.5m間隔で設けており、また東西方向にも何本かの探査測線を設定した。また、古墳前方部の北西隅と南西隅、および古墳のくびれ部北側にも探査区域（C、D、E）を設定して探査を実施した。もう一つの課題である古墳主体部の位置を推定する探査は、後円部上に7m×10mの範囲を設定し行った。

探査結果については、第24図に示すように、解析により擬似的な地中断面図（Profile図）を作って表示している。断面図において、左の縦軸には、送信アンテナから送出されたレーダー波が反射して、受信アンテナに戻るまでの走時（単位：ns）を示しており、右側の縦軸には、走時とレーダー波の伝播速度から推測される地表からの深度を示している。横軸は、測線の距離を示している。図の濃淡については、レーダー波の反射の強い領域を黒色、弱い領域を白色として表示している。



第23図 地中レーダー探査を実施した範囲。

また、全測線から得られた探査データをまとめて、Time Slice 図法による解析も行っている。この図法では、各測線でのプロファイルを総合して、走時のある時間幅（深度）のデータを選別し、受信されたレーダー反射波の相対強度を平均化し内挿することにより、パターンとして示す。この解析方法は、反射強度を三次元で整理し、平面的に異常応答の深度変化を追っていく手法であり、反射の強弱を色分けしてわかりやすく表示する（Conyers & Goodman, 1997）。Time slice 図の手法は遺構や遺物の平面分布が研究対象となる考古学の研究において、結果を検討し易く、非常に有用である。

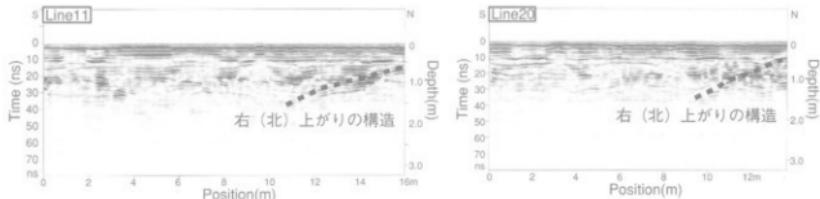
探査結果

(1) 周濠を対象とした探査：探査区域 A～E

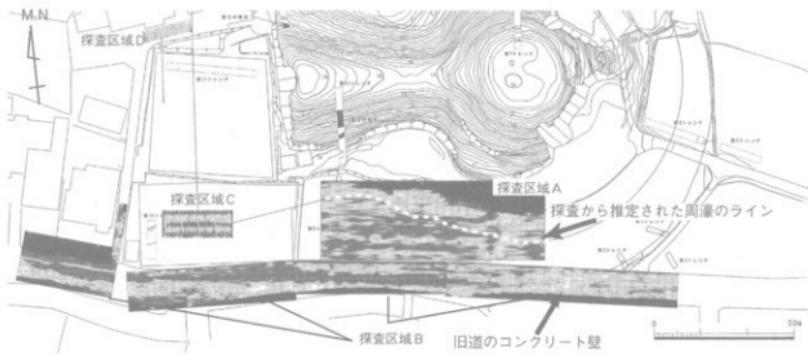
探査区域 A における代表的な探査結果（断面図）を第24図に示す。図中左に示している LINE11 では、測線の距離11m～終地点にかけて右上がり（北上がり）の構造が見られる。右図の LINE20 においても、10m～終地点の範囲に同様な構造がある。これらの反応は、発掘調査から推測される墳丘の立ち上がり部分と良く対応しており、墳丘第1段斜面部を捉えていると推測できる。周濠の南側の立ち上がりについては、この探査区域では現れておらず、より南側に存在する可能性が考えられた。

第25図には、A～D の各探査区域での探査結果を総合して得た Time slice 図を示した。図で表されている面の深さは、探査区域 A～C では、約70～105cm、探査区域 D では245～280cm である。

探査区域 A では墳丘裾部を白点線で示した。探査から推定された周濠のラインは、過去の発掘調査の結果と比べると、作り出し部分がやや曖昧になっている。この理由は、探査範囲に点在した果樹を避けて探査を行ったため、測線間隔が広くなり（約1～2.5m 間隔）、また測線の平行性も



第24図 探査区域 A で得られた代表的な結果 (250MHz)。



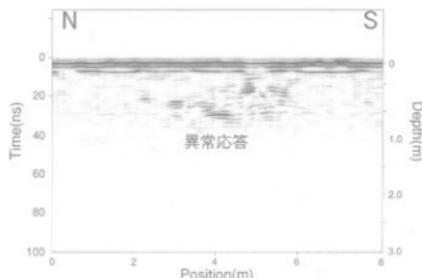
第25図 採査区域 A～D における Time slice 図（深度約70−105cm）を示す。

悪くなり、解像度が低くなったためである。

探査区域 B はアスファルトで舗装された道路上にあたる。探査結果には、約70cmまでの深度において、直線上に続く強い反射パターンが認められる（第25図）。その形状と深度から、この反応は、旧道の跡を捉えていると考えられた。探査の後で、探査範囲の一部で行われた発掘調査からは、異常応答に対応してコンクリート製の側壁が見つかっている。つまり、ここで認めたレーダー波の異常は、古墳の遺構とは関係しないものであった。

探査区域 C はビニルハウスの内部に設定した。探査結果を見ると、ビニルハウスの鉄筋からの反射の影響が強く、良い結果は得られなかった。また、探査区域 D では、現代の造成によって厚い盛土が覆っており、遺構面までは2m以上と深いことも理由で、レーダー波の反射は十分な強度を示さず、明瞭な反応は認められなかった。

次に、探査区域 E で得られた結果を第26図に示す。図をみると、測線距離4m、深度約110cmの地点に強い反射の異常が認められる。この測線の近傍で発掘調査が行われているが、その結果を参照すると、この異常は埴輪或いは埴輪列痕に対応する可能性がある。ただ、探査地点は小さな谷状の地形の落ち込んだ領域であるために、転落した葺石が溜まっている箇所の可能性も考えられるので、さらに詳細な調査による検討が望まれる。

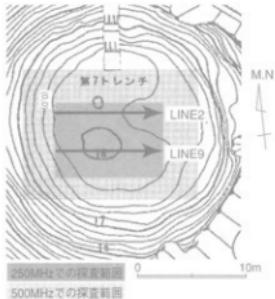


第26図 採査区域 E で得られた代表的な探査結果（LINE 1、250MHz）。

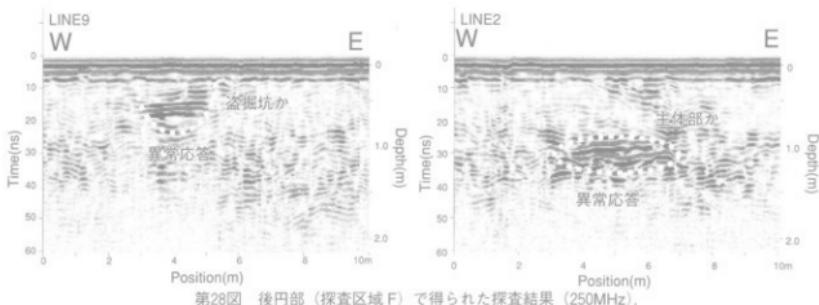
(2) 主体部における探査：探査区域 F

後円部の墳丘墳頂部において、東西7m、南北12mの探査区域を設定した。探査では、250MHzのアンテナの他に、浅部をより詳細に調べるために500MHzアンテナも使用した。500MHzアンテナによる探査は、範囲を少し広げて、東西15m、南北12mの範囲で行った。第27図に、探査範囲を示している。

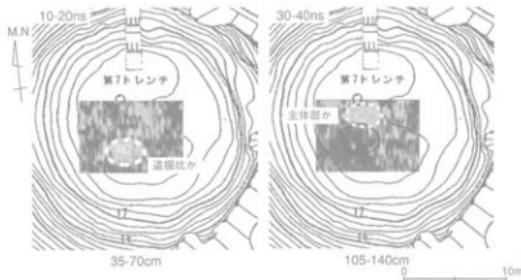
第28図には、250MHzのアンテナで探査した2本の測線(第27図の矢印)の例を示している。LINE9では、測線距離3~6m、地表面~80cmの深度に異常応答が見られた(第28図左)。この異常は地表面近くから続いているので、主体部を捉えたとは考えづらく、盗掘坑であると推測された。LINE2の結果(第28図右)では、測線距離3~7m、深度約1mの領域に強い異常応答が認められた。この異常は強く、かつ比較的深い位置にあることから、主体部による反応と考えられた。おそらくは石室の天井石を捉えた反応と解釈される。第29図には、250MHzアンテナで得た各測線の結果を総合して作成したTime slice図を示している。左の図は、走時が10~20nsの約35~70cmの深度での応答であり、第28図の盗掘坑の応答の範囲も示されている。右の図は、走時が30~40nsの深度105~140cmの応答であり、主体部の異常範囲が認められる。第30図には、500MHzのアンテナを使用した探査結果から作成したTime slice図を示している。周波数の高いアンテナの方が浅部での分解能は高く、異常の平面分布の精度もより高い。図で示された主体部の異常域は約5m×2.5mの大きさである。そして、東西方向、つまり主軸に並行して築造されていることが読み取れる。



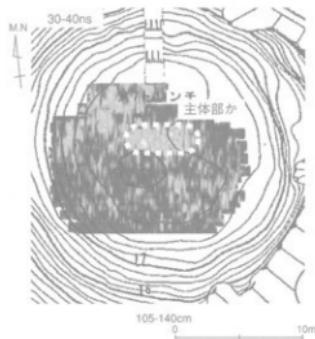
第27図 後円部（探査区域 F）での探査範囲。



第28図 後円部（探査区域 F）で得られた探査結果（250MHz）。



第29図 後円部（探査区域F）で得られたTime slice図（250MHz）。



第30図 後円部（探査区域F）で得られたTime slice図（500MHz）。

まとめ

渋野丸山古墳において地中レーダー探査を行った結果、古墳南側の墳丘の立ち上がり部分を明確に捉えることができた。この結果は、発掘調査から推測されていた墳丘の立ち上がり部と整合する。

しかし、南側の舗装道路上での探査では、地中にある旧道のコンクリート壁の反応に隠れて、遺構の存在は判読できなかった。古墳前方部の北側では、遺構を示唆する異常が認められた。異常域には、埴輪或いは埴輪列痕が存在する可能性もある。

今回の探査で認められた異常応答の領域について、密な探査を行うことで、古墳内部や周濠の詳細を明らかにできると考える。

古墳後円部の墳頂で行った探査では、主体部を示す異常反応が明瞭に表れた。500MHzの周波数のアンテナによる探査から、主体部の位置と大きさが推定できた。渋野丸山古墳は、徳島県の史跡指定を受けている。主体部の発掘調査を行うことは難しく、今回、地中レーダー探査により得られた結果は貴重な情報となる。

謝辞

探査において、徳島市教育委員会の下田順一氏にはたいへんお世話になりました。

参考文献

- L. B. Conyers & D. Goodman (1997) : Ground-Penetrating Radar? An Introduction for Archaeologists, ALTAMIRA PRESS, pp.232.
- 酒井英男、小島信人、宇野隆夫、田中保士、アダムオニール、上坂麻子、佐藤朗 (1998) : 岐阜県養老郡象鼻山1号前方後方墳の電磁気探査—地下レーダー探査と高密度電気探査、象鼻山1号古墳—第2次発掘調査の成果—、養老町埋蔵文化財調査報告書第2番、養老町教育委員会、富山大学人文学部考古学研究室、103-116。
- 中禁貴元、酒井英男 (2001) : 地中レーダー探査による柳田布尾山古墳の構造の研究、柳田布尾山古墳、氷見市埋蔵文化財調査報告書第33冊、氷見市教育委員会、38-55。
- 岸田 徹、酒井英男 (2002) : 富崎千里古墳群における地中レーダー探査、富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書、婦中町教育委員会、127-131。
- 岸田 徹、酒井英男 (2003) : 阿尾島田 A 1号墳におけるレーダー探査、阿尾島田 A 1号墳—第3次発掘調査報告書、富山大学人文学部考古学研究室、34-37。
- 岸田 徹、酒井英男 (2005) : 富山県阿尾島田 A 2号墳における地中レーダー探査、阿尾島田 A 2号墳—第1次発掘調査報告書—、富山大学人文学部考古学研究室、25-28。

第5章 総括

1. 墳丘の形態復元

平成17年度までの発掘調査の成果により、右隅角及びその周辺の墳丘裾部を除き、墳丘形態の復元が可能となった。

1) 平面形

後円部は、6か所のトレンチにおいて墳端を確認した。これをもとに円弧を引いて復元すると、直径約69mの円になった。前方部は、第11トレンチと第22トレンチにより、前方部前端を確認した。これにより、前方部の長さは、約44.5mとなった。よって、墳丘長は約105mであり、後円部に対して前方部の長さは相対的に短いことが明らかになった。

2) 墳丘

後円部と前方部は共に3段築成である。詳細を以下述べていく。

まず、第6トレンチ、第7トレンチ、第8トレンチ、第20トレンチを基に後円部の各段築について復元を行う。

第6トレンチから周濠底はT.P.約5.5mであり、第1段斜面の角度は、約35度であった。これを基に第1段平坦面の高さT.P.約9m、斜面幅約6.5m+ α と復元した。第8トレンチから、周濠底は、T.P.約6.8mであり、第1斜面の角度は約30度であった。これを基に第1段平坦面の高さはT.P.約9.2mと復元できる。次に、第7トレンチと第20トレンチの成果から復元を行う。周濠底はT.P.約8mであり、第6トレンチと比べて2.4m高くなっている。墳丘第1段は第4トレンチの遺存状態が良かったので、これを参考にした。第1段斜面の角度約35度、幅1.6m、高さ1.2mと復元した。第1段平坦面は、T.P.約9.2m、幅4mであった。第1段平坦面の高さはほぼ同じ高さである¹⁾。第2段斜面は角度約25度、幅4.85m、高さ2.2mであった。第2段平坦面は、T.P.約11.5m、幅約1m。第3段斜面は、角度約25度、幅11.5m高さ5.1mであった。墳頂部の平坦面はT.P.約16.5mで、この上に壇がある。この壇の高さは、T.P.約18m+ α である。なお、この壇の中心部に、竪穴式石室がある。これは、富山大学によるレーダー探査結果に詳しいが、石室の主軸は、東西方向であることなどが分かってきた。

統一して前方部についてであるが、これについては、第5トレンチと第14トレンチを基に復元を行う。周濠底はT.P.約5.9mであった。第1段斜面は、角度は約25度で、第1段平坦面に達する。第1段平坦面は、攪乱のため確認できなかった。しかし、第2段斜面の傾斜角度が25度であると推定すると、第1段平坦面の高さは約9.3m、幅約1.5mと復元できる。さらに、第1段斜面の幅7.3m、高さ3.8mと復元できる。第2段斜面は幅約5.3m、高さ2.3mである。第2段平坦面は、T.P.約11.65m、幅約1mである。第3段斜面は、角度約30度、幅約7mで前方部平坦面(T.P.約15.7m+ α)に達する。しかし、前方部頂の前端は削平を受けていたために、本来の形態等は不明である。前方部前端については、前方部の5つのトレンチの結果により、推定が可能である。まず、第22トレンチにより左隅角の位置が判明したこと。各トレンチで確認した側面の墳端を延長すること。これらから、前方部前端の幅が約59mで、大きく開いていると推定復元できる。

3) 造り出し

造り出しへは、第17トレンチ～第19トレンチを基に復元を行う。前方部に近い所の遺存状態が良いことから、これを参考にした。高さはT.P.約7m+ α で、墳丘第1段平坦面とほぼ同じ高さである。また、基底部で測定して、長辺約13m、短辺約4.5mが復元できる。また、地山削り出しによって造

られていることから、古墳が設計された当初から、この場所に付設することが計画されていたことも分かる。

4) 周濠

周濠は、周辺の各トレンチの成果を基に復元を行う。後円部側の周濠外側肩部を検出し、周濠の底の高さや幅が一定でないことを確認した。前方部左側面の周濠外側肩部は、第28トレンチや第30トレンチ共に攪乱を受ける等して確認できていない。そこで、第5トレンチの土層の堆積状況から推定した。前方部前面の周濠外側肩部は、第22トレンチで確認した。第11トレンチでは調査地の制約があり、外側肩部は確認できなかった。このため、第22トレンチの結果と前方部前面の復元図から周濠外側肩部を推定した。前方部右側面の周濠は、第12トレンチと第24トレンチで全く確認できなかった。よって、第21トレンチの結果から、くびれ部付近で周濠という形は無くなっていると考えた。ただし、第24トレンチ北側の岩盤は、測量図から見ても、前方部右側面に沿うように人為的な掘削の痕跡がある。のことから、意識的に平面上の企画を基にした、古墳の区画を行っていることが推測できる。以上のことから、基本的な周濠の形は、古墳の南側で確認できた盾形を意識していたと考えられる。

5) 周庭帯

周庭帯の有無について検討する。第9トレンチや第3トレンチでは、地山層が三ツ岩谷川に向けて傾斜していることで確認できなかった。第29トレンチと第31トレンチでは、地山層の平坦面と、現在の多々羅川に向けての傾斜面を土層で確認したこと。第27トレンチ～第31トレンチの結果、地山層の平坦面の高さが、西に向けて徐々に上がっていること。レーダー探査の結果からも、現在の道路下の反応に変化が見られなかったこと。以上のことから、周庭帯と判断できるものはなかった。

(註)

- 1) 墳丘基底部の高低差を、墳丘平坦面を水平に造成する際に解消する工法があること。後円部の中心が段築によって移動すること等については、北條芳隆氏の「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価－成立当初の畿内と吉備の対比から－」(『考古学研究』第32巻第4号1986年)に詳しい。

2. 墳丘の構造

墳丘の構造は、まず最初に北から延びる尾根の切断を行った後、地山あるいは岩盤を削り出し始めるところまでは共通している。しかし、後円部と前方部ではその後の方法が全く異なっている。

まず、後円部側では、墳丘第2段斜面途中まで地山を削り出し、その上に盛土を行っている。これに対し、前方部側では、最初に地山あるいは岩盤を削り出して、基本的な形成をした後、盛土を部分的に行い形を整えている。

また、造り出しへは、地山削り出し形成している。盛土の有無については、今回の発掘調査では確認できなかった。

3. 莢石の葺き方

葺石の葺き方は、各トレンチの結果から、墳丘の北側とその他のか所では異なっていた可能性がある。

古墳の北側以外の場所では、各段築の斜面に葺石が施されていた。これに対し、墳丘の北側では、第21トレンチでのみ第1段斜面から葺石を施していた。その他のトレンチでは葺石の存在が確認できなかった。ただし、崩れた可能性もあり、即断しにくい。

第31図 渋野丸山古墳トレンチ配置・墳丘復元図

0 30m
1 : 500

X=112100m

Y=95200m

Y=95250m

Y=95300m

Y=95350m

X=112100m

X=112050m

X=112000m

X=112050m

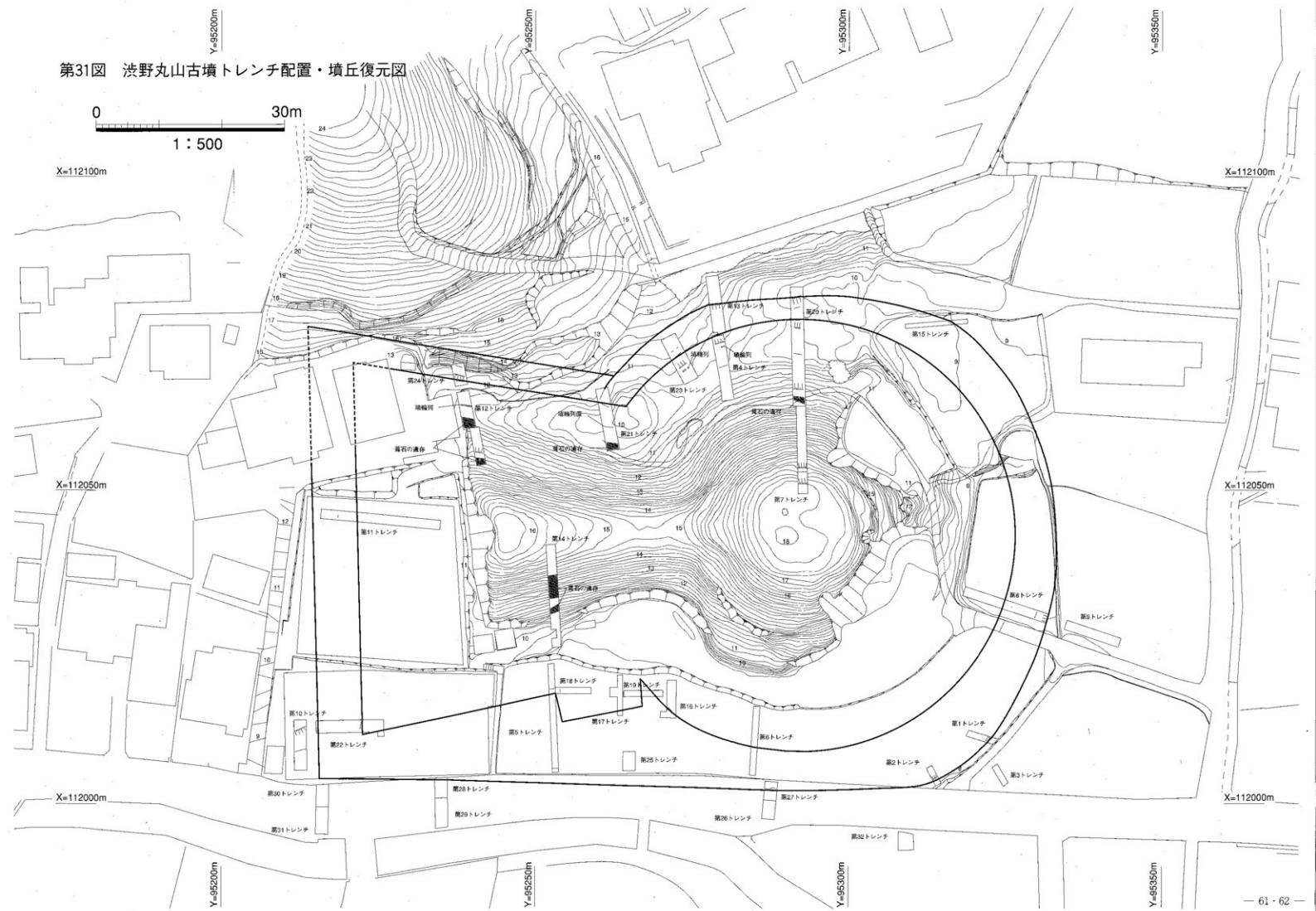
Y=95200m

Y=95250m

Y=95300m

Y=95350m

— 61 · 62 —



葺き方については、基本的には、直方体に近い石材を、長軸が墳丘裾部に平行となるように置いて、基底石としている。その上に墳丘斜面に対して長軸が直交する方向に埋め込めるようにして葺いている。ただし、造り出しつ�ては、遺存状態が良くなかった。しかし、第17トレンチから推測はできると考える。基底石と判断できるものはなく、石材を貼り付けるようにして置いていた。

4. 増輪の樹立方法

これまでの発掘調査では、前方部で7個体、後円部で5個体の増輪を原位置で検出した。さらに、第21トレンチでは、掘り方を検出している。

いずれも、0.3m~0.4mの幅の布掘りの掘り方が設けられている。その後、各増輪の基底部の大きさに合わせて、幅や深さを調整するために、さらに掘り直している。ここに、各増輪を据え、埋められている。

5. 出土遺物

出土遺物のはば全てが増輪である。他には僅かに土師器が出土している。

増輪の組成については、円筒増輪、朝顔形増輪、形象増輪である。

円筒増輪は、透し穴は円形であり、黒斑がある。外面調整にヨコハケを行っている。これらのことから、川西編年Ⅲ期に属する。また、肉眼でも赤色顔料塗布の跡が確認できた。この赤色顔料の分析を徳島県立博物館の協力により行ってもらった。その結果、ベンガラであることが分かった。

朝顔形増輪は、復元作業を行ったが破片であるために、正式に図化できなかったものも多数ある。今回報告を行ったもの以外にも、多くのトレンチから出土しており、相当数の朝顔形増輪が据えられていたことが分かった。

土師器については、古墳の南側で検出したものが多かった。これらは祭祀に使用された可能性高いと考えられる。

6. 墓域と築造時期

渋野丸山古墳は、南側から見ることを意識して墓域を企画したと考えられる。これは、①丘陵の先端部に占地している。このため、平野部で造営する以上に、地山・岩盤の掘削に手間取ったと考えられる。故に、本来左右対称となるべき周濠が大きく変化しており、北側の周濠の一部が省略されていること。②祭祀が行われたと考えられる造り出しが、南側にのみ付設されていること。③南側からのみ古墳全体を見通すことが可能である。以上の理由である。

また、墓域を区画する周濠については、元々盾形の周濠を企画し造営をしたことも推察できる。ただし、南北の高低差があるために、古墳の周間に貯水することはできない。

これまでのことから、渋野丸山古墳の規模等を再掲する。

古墳全長約105m

後円部 径約69m、高さ18m+α

前方部 幅約59m、長さ約43m

周濠 全長約118m、最大幅約82m

墳丘 後円部、前方部とともに3段築成

築造時期については、次のことから推定した。

①造り出しで、須恵器を伴わず土師器のみ出土した。これが、古墳築造時期の下限であると考えら

れる。

- ②埴輪は川西編年Ⅲ期に属する。しかし、他地域との形態や技法等の比較検討はまだ十分とはいえない、今後の課題である。
- ③前方後円墳で墳丘は3段築成である。また、造り出しが、古墳のくびれ部付近に付設されている。以上のことから、遼くとも5世紀前半頃に比定できると推定した。

写 真 図 版



古墳遠景（航空写真・南から）

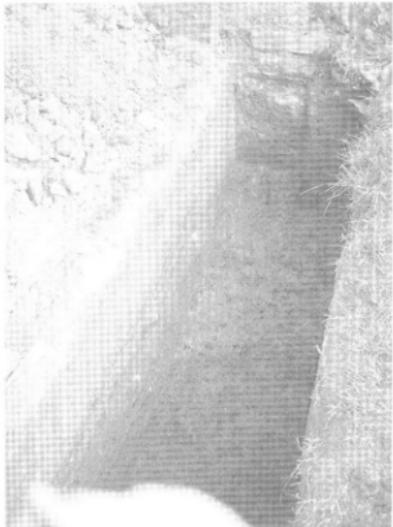
徳島県立博物館提供



古墳全景（南から）



第1トレンチ（西から）



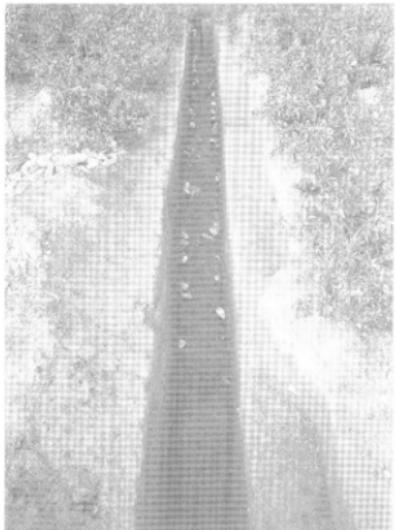
第2トレンチ（西から）



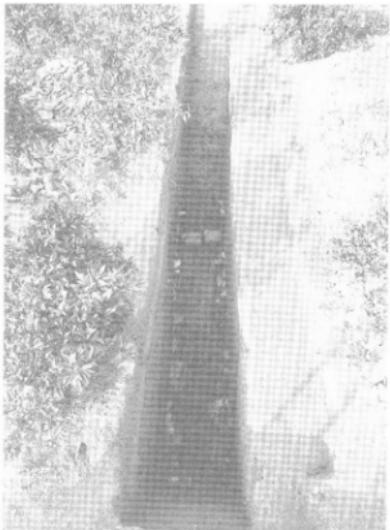
第3トレンチ（南西から）



第4トレンチ（北から）



第5トレンチ（南から）



第6トレンチ（南から）



第7トレンチ（北から）



第7トレンチ墳丘第3段・壇（北から）